
遊戯王GX 闇を統べる決闘者（仮）

Y B F

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX 闇を統べる決闘者（仮）

【Nコード】

N0243U

【作者名】

YBF

【あらすじ】

少年、玄咲楓は気づいたら遊戯王GXの世界にいた。原因は不明。持っているのはこの世界における自分の存在を証明する学生証と、愛用するデッキ。目の前で行われているのはデュエル・アカデミア入学試験（実技）。

楽しければそれでよし、という信念のもと、玄咲楓は遊戯王GXの世界に介入していく。

<旧タイトル：遊戯王GX二次創作小説 現実↓GXモノ（現在無題）>

TURN・01 超常現象発生！ いきなりのデュエル！（前書き）

見切り発車です。どうも、YBFです。

気晴らしに書いたもので、クオリティは低いかもしれませんが、
よろしく願います。

TURN・01 超常現象発生！ いきなりのデュエル！

目が覚めると、見覚えのあるシルエットが目の前で闘っていた。炎を吐くドラゴン。ひ弱そうな骸骨。どれもが現実味の無いシルエット。

だが、それはどこともなくリアルで、生きているようにも見えた。

——が、同時に生き物ではないとも感じられ、僕——玄咲くろさきかえで楓は困惑した。

僕は確か、大学受験に向けて勉強し受験を翌日に控えていた。だから、いつもよりも早く寝た。それくらいしかいつもの生活との相違点はないはずだ。

にも関わらず、なぜこうもいきなり見覚えの無いところにいるのだろう。そして、なぜ見覚えのあるシルエットが闘っているのか。そのシルエットを僕は確かに見た事がある。だが、それは二次元での話だ。

とりあえず、一言で言ってしまうば、だ。

——遊戯王OCGのモンスターが、なぜ立体化してるのだろうか。

その一言に尽きる。

炎を吐くドラゴンは『メテオドラゴン』だろうし、骸骨はどこから見ても『ワイト』。

そのモンスターの傍らには、デュエルディスクを装着した学生と、スーツ姿の大人。

よく目を凝らして見ると、アニメで見た気がするシルエットを持つ学生もいた。どこことなく空気な感じの。

……このシーンを、見た事がある。そう。

遊戯王デュエルモンスターズGX第一話。
デュエルアカデミア入学試験（実技試験）だ。

まさか、ネットでよく見た、トリップ系オリ主にでもなったというのだろうか。

それで、ここは遊戯王GXの世界、という事なのだろうか。

そこまで推測を立てた時、左腕に何かを着けている感じがした。見てみると、自分の左腕にもデュエルディスクが装着されていた。

……それを観察していると、デッキが入っていた。

つまり、コレが僕のデッキなのだろうか。

自分の愛用していたデッキは【闇ドラゴン】と【ライトロード】、それと闇ドラゴンから派生——と、いうよりも改悪（改良ではない）

——した【真紅眼の黒竜】レッドアイズ・ブラックドラゴンの亜種。

どれもこれも世界に何枚しかないカードだとか、そういうのは入っていないはずだ。

デッキをパラパラと確認すると、どうやら三つ目の【真紅眼の黒竜】亜種デッキだったようだ。だが、キーカードである『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』がない。

……何これ。ふざけてるの……？

まあ、原因は恐らくメインキャラクターであるダークネス状態の天上院吹雪が使用しており、かつ効果がアニメとOCGで大きく違う事、だろうか。

アニメだと『真紅眼の闇竜——《レッドアイズ・ダークネスドラゴン》』の効果を引継ぎ、かつ、メタルと名の付いたモンスターらしい効果を持っていた。

だが、OCGでは手札及び墓地のドラゴン族モンスターを一体特殊召喚できる効果となり、ダークネスもメタルも関係なくなっている。が、それによって生まれたデッキが【闇ドラゴン】だ。

高攻撃力のドラゴン族モンスターを『トレード・イン』や『未来融合・フューチャー・フュージョン』などで墓地に落とし、特殊召喚が容易な『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』を場に出し、効果で墓地に落とししたモンスターを場に並べる。

比較的容易に高攻撃力のモンスターを何体も場に出す事による一斉攻撃。

これが決まると最高に楽しい。

—— だけど、僕が求めたのはそれよりも上のロマン。

原作を読んでいて一番気に入ったモンスター、それは『真紅眼の黒竜』だ。

それを活躍させるにはどうすればいいか。考えた結果が、【闇ドラゴン】に『真紅眼の黒竜』や『レッドアイズ・ブラックメタルドラゴン』までぶち込んだ、一種のファンデッキだ。

【ライトロード】や【闇ドラゴン】とは違い、自分で一から考えたデッキ。勝率は三つの中で一番低いものの、一番気に入っているそれに、『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』さえあれば、ある程度は勝てる。そう思っていたのだが。

…… ない、ってどうなのよ。いや、うん。仕方がないのかもしれないけれども……。

とりあえず、なぜかは知らないが持っていたカバンを漁ると、【ライトロード】もあつたし、【真紅眼の黒竜】を強化できそうなカードも何枚が入っていた。

どうなるかはわからない。

だけど、折角のトリップなんだ。楽しまなければ損だろう。

僕は『真紅眼の黒竜』が好きでこのデッキを組んだ。

ならば、このデッキでがんばっていくしかないだろう。…… 多分だが、懸念材料は【真紅眼の黒竜】亜種デッキは、カードを見る

限り、非常に事故率が高いのだ。

某所での対戦で何度か使ったときは、不思議と手札事故しなかったのだが、次こそ事故するかもしれない。

胸元を見ると、11と書かれた札。

どうやら、僕の学力は11番相当らしい。……と、いう事はラー・イエロー確定、だろうか――

<受験番号10番から20番の受験生はデュエル場へ――>

――でもまあ、実技次第だろうけど。

とりあえず、先ほど見つけたカードの中から何枚かをデッキにいれ、デッキから何枚かをカバンに入れる。

これである程度、本来の【真紅眼の黒竜】亜種デッキに戻った。

まあ、完璧とは言わないものの、俺の望んだロマンがそこには詰まっている。

――さあ、行こう。楽しむために。

……まあ、内心はかなりビビってるんだけどね!?

ソリッドビジョン、遠くから見ても十分怖いんですけど!?

超常現象発生！ いきなりのデュエル！

そんなこんなで、移動中にどうにか精神統一。
うん、目を瞑るのは精神統一には役立つ。

まあ、デュエル場に向かうのに大分苦戦してしまったが、まあ、
とても遅れたわけじゃないから、大丈夫だろう。多分。

そして、目の前にはサングラスをかけた大人。どうやら彼が試験
官らしい。

それにしてもモブ臭がする。

いや、実際にそうなのかもしれないが——今、この瞬間にそんな
ものは関係ない。

「受験番号11、玄咲楓。よろしくお願いします」

「これより試験デュエルを開始する！」

「デュエル！」

「デュエル！」

玄咲楓 LP4000

試験官 LP4000

何事もノリが大切。僕も叫んでみた。……さて、と。手札は……

！？

……これは……もしかしたら、後攻ワンキルいけるか……？

「先攻は私だ！ ドロー！ 『重装武者ベン・ケイ』を攻撃表示で召喚！ さらに『デーモンの斧』を二枚装備する。これで『重装武者ベン・ケイ』の攻撃力は2500となり、バトルフェイズ中三回の攻撃を可能とする！」

重装武者ベン・ケイ

ATK500 DEF800

ATK500↓ATK2500

目の前の『重装武者ベン・ケイ』が両手に『デーモンの斧』を装備し、叫んでいる。

うわー。凄くリアルなんですけど。これがソリッドビジョンか。どう考えてもオーバーテクノロジーですね、コレ。あまりにリアルでビックリなんだが。

と、いうよりも、目の前にいるとかなり怖い。遊戯王を知らなかったら、もっとビビっているはず。

「カードを一枚伏せ、ターンエンド！ さあ、君のターンだ！」

『重装武者ベン・ケイ』に『デーモンの斧』……まさか、【ベン・ケイ1キル】だろうか。『デーモンの斧』のおかげで攻撃力は2000を越え、その上で三回攻撃。

コレ、本当に試験用のデッキだろうか。

マッチ戦のないネットの某所だと禁止カードにもされる『重装武者ベン・ケイ』だからな。実技試験は一度のデュエルで判断するらしいし、どう考えても試験用じゃない気がする。

それに、先ほどから「あのバカ！ 試験用デッキを使えといった
だろうに！」とか、「あの受験生、終わったな」などという声が聞
こえる。

え。マジで試験用デッキ使っていないの、目の前の人。ヤバくね？

……まあ、いいや。

この手札ならソイツ相手でも後攻ワンキルくらい、（謎のチート
的なドローのおかげだが）できそうだ。向こうの手札にあるのが『
冥府の使者ゴーズ』だとか、『クリボー』だとか、『バトルフエ
ーダー』でない限りは、だが。

まあ、『冥府の使者ゴーズ』や『クリボー』はこの世界だと相当
なレアカードのはず。『バトルフエーダー』は5D・sが初出だっ
たはず。故に、今はないだろう。

つまり。このデュエルは、僕のワンキルで全てが終わる。

「僕のターン！ ドロー！」

ドローしたカードを一応確認する。……うん、コイツがなくても
ワンキルはできそうだ。

「僕は手札の『真紅眼の黒竜』を墓地に送り、『ダーク・グレファ
ー』を攻撃表示で特殊召喚する！」

ダーク・グレファア

ATK1700 DEF1600

『真紅眼の黒竜』を試験官に見せ、それを墓地に送る。

観客席からは驚きの声が上がっているのがわかった。確かに、こ
の世界では『真紅眼の黒竜』は何十万もするレアカードだ。……ス

テータスはともかくとして。

だが、世界に何枚しかない、というカードでもない。メインキヤラクターの一人、天上院吹雪も使用しているとは言え、これくらいなら大丈夫だろう。

……と、いうか。

さつきから、「『真紅眼の黒竜』を墓地に送る？ コイツはバカか！？」なんて声が聞こえるんだが。

バカはお前だ！

わざわざ『真紅眼の黒竜』を手札から通常召喚する機会なんてそうそうないっての！ いやマジで！

「さらに『ダーク・グレファア』の効果発動！ 手札の『ダーク・ヴァルキリア』を墓地に送り、デッキからもう一枚の『真紅眼の黒竜』を墓地に送る！」

さて、と。これで下ごしらえは完了。本番はここからだ。

「そして、手札から通常魔法『思い出のブランコ』を発動！ 自分の墓地に存在する通常モンスターを自分フィールド上に特殊召喚し、エンドフェイズにそのモンスターは破壊される。僕は『ダーク・ヴァルキリア』を攻撃表示で特殊召喚する！」

ダーク・ヴァルキリア

ATK1800 DEF1050

目の前に現れたのは、黒い翼を持つ天使。どことなく禍々しいが、どことなく幼く、可愛らしい感じがする。元のカードが『デュミナス・ヴァルキリア』だしな。

このカードも十分アイドルカードに分類されるだろうな。

まあ、今は関係ない。それよりも、一応説明を入れるべきだろうか。デュアルモンスターの。

「『ダーク・ヴァルキリア』は効果モンスター。しかし、フィールド及び墓地では通常モンスターとして扱う。よって『思い出のブランク』の効果の対象となる！」

デュアルモンスター。

フィールド上及び墓地で通常モンスターとして扱われるこのモンスターカードは非常に使い勝手がいい。

通常モンスター専用のカードが使える、というのは便利だ。『思い出のブランク』や『黙する死者』、『戦線復活の代償』などの効果の対象になるし。

「そして、装備魔法『スーペルヴィス』発動！『ダーク・ヴァルキリア』に装備！そして、『ダーク・ヴァルキリア』は再召喚された事になり、効果モンスターとして扱われる！」

さて、と。ショータイムはこれからだ。

「『ダーク・ヴァルキリア』の効果発動！一度だけこのカードに魔力カウンターを載せ、一つにつき攻撃力を300ポイント上げる！」

ダーク・ヴァルキリア

ATK1800 ↓ ATK2100

「だが、それでも攻撃力は2100ポイントだ。私の『重装武者ベイン・ケイ』の攻撃力は2500……まだ400足りないぞ？」

「戦闘での破壊は無理でも、効果では可能！『ダーク・ヴァルキリア』のもう一つの効果を発動！カウンターを一つ取り除く事でフィールド上のモンスター一体破壊する事ができる。カウンターを一つ取り除き、『重装武者ベイン・ケイ』を破壊する！」

ダーク・ヴァルキリア

ATK2100 ↓ ATK1800

これで試験官のフィールドはリバースカードのみ。だが、このカードで破壊すれば――

「さらに、手札から速攻魔法『ダブル・サイクロン』を発動！ このカードは自分と相手フィールド上の魔法・罠カードを一枚ずつ破壊する。自分フィールド上の『スーペルヴィス』と先生のリバースカードを破壊！」

赤と黄色。色違いの大竜巻が発生し、『スーペルヴィス』とリバースカードを破壊して消える。リバースカードは『聖なるバリア・ミラーフォース』か。……なんというか、定番だな……。

って、おい。さつきから「自分の装備カードを破壊する？ バカじゃないの？」なんて声が聞こえるんですけど。バカはお前だ！

「そして、破壊され墓地に送られた『スーペルヴィス』の効果発動！」

『スーペルヴィス』は、墓地に送られた時こそ、本当の性能を発揮するカード。

「墓地に存在する通常モンスターを一体選択し、特殊召喚する事ができる！」

「何！ 君の墓地には……！？ まさか……！」

「そのまさかですよ。僕は墓地から通常モンスター『真紅眼の黒竜』を特殊召喚するっ！」

真紅眼の黒竜

ATK2400 DEF2000

テンションが上がってきた。

ネットの某所でよく用いたコンボ。『スーペルヴィス』を装備した『ダーク・ヴァルキリア』で相手モンスターを排除してからの『

ダブル・サイクロン』。

そして、『真紅眼の黒竜』の特殊召喚。
わざわざ生け贄召喚する必要はない。

むしろ、この方法で特殊召喚する方がかつこいいに決まってる。

『真紅眼の黒竜』が目の前に現れ、咆哮した。

黒一色に、真紅の眼。

その姿に目はくぎづけになる。

が、まだデュエルは終わっていない。

まあ、既に勝敗は決したような気もするが。

さきほどから「バカか!？」なんて発言が聞こえていたのだが、
『真紅眼の黒竜』がフィールド上に現れた事により、黙ったようだと、
というよりも「すげえ」とか「そうか、そのために……」なんて
声が聞こえてくる。

うん。やはり予想通り。遊戯王の世界よりも現実世界の方がレベル
が高そうだ。まあ、壊れ性能なアニメオリジナルカードなんても
のが相手だと苦戦しそうだけでも。

とりあえず、今はそんな事よりもこのデュエルを終わらせる事
の方が先だ。

「バトルフェイズ!」 『ダーク・グレファア』、 『ダーク・ヴァル
キリア』、 『真紅眼の黒竜』でダイレクトアタック!」

まず、『ダーク・グレファア』が試験官を右手に持った剣で切り
払い、『ダーク・ヴァルキリア』は手から純白の奔流を放ち、『真
紅眼の黒竜』は黒炎を吐き出す。

——って、ちょっと待った。『ダーク・ヴァルキリア』の攻撃が
純白の奔流、だと? “ダーク”と名がつくなら漆黒の奔流の方が
似合いそうなんだが。

……あ。そう言えばアニメ遊戯王デュエルモンスターの『デュミナス・ヴァルキリア』の攻撃は漆黒の奔流だったっけ？ ……純白と漆黒、闇属性と光属性で対比してるのか？ だとすれば、納得がいくが。

まあ、そんな考察はともかく。

試験官は「ぐわああっ！！」と叫んで吹き飛ばされる。あれ？

ソリッドビジョンだね、コレ。そんなにヤバいの？ いや、アニメ通りだけどさあ。衝撃も再現するんですか、ソリッドビジョンって……。

そう考えると、さらに怖いんですけど。……ダメージ受けたくない……。

……ま、まあ、それはともかくとして。

攻撃力1700、1800、2400の三対による攻撃。合計5900ダメージ。

うーん。OCGだと全然だめだな。まだ2100削る必要がある。だが、アニメではライフポイントは4000だから、1900ポイントのオーバーキルとなる。うん、予想通り、後攻ワンキル達成。デュエルが僕の勝利で終わった事で、ソリッドビジョンで映し出されたモンスターたちが消えてゆく。

『ダーク・グレファアー』、『真紅眼の黒竜』の順で消えてゆき、『ダーク・ヴァルキリア』が最後に消えていった。

玄咲楓 KP4000

試験官 LP0 (1900のオーバーキル)

「なかなかの実力だ。これで受験番号11の試験デュエルを終了する」

「ありがとうございました」

一礼して、デュエル場を去る。とりあえず、礼儀は大事だしな。とりあえず、これからどうしようか。

ここにトリップした方がいいが、住所とか金とかどうなっているのだろうか。……カバンの中を漁れば見つかるだろうか。

カード以外のものを物色する。

……あれ。銀行通帳とか入ってら。うわ、中学の学生証もある。

お、これで住所も完璧……ん？ 待った。

名前は現実と同じ。住所も現実と同じらしい。……つまり、遊戯王の世界での僕に憑依した、という形だろうか。それも、中学時代の。

とりあえず、トイレに向かい鏡を見てみると、そこには数年前の僕の顔があつた。

——女顔で悩んだ頃そのままだ。くそ、どこからどうみても“男の娘”じゃねえか——

と、いうのはおいておくが、どうやら、僕の仮説は正しかったらしい。

とは言っても。童実野町って……どこら辺なんだろうか。どうやって家に帰るのだろうか。とりあえず、カバンを漁った時に見つけたノートパソコンで調べればいいのだろうか。

まあ、うん。それはおいおい調べればいいか。

今はとりあえず、会場に戻って遊戯王デュエルモンスターズGXの主人公、十代のデュエルを待つことの方が先決かな。生で見みたいしね。

そう思って、僕はトイレを出て、観客席へと向かう。

これから僕がどうなるのかは知らない。でも、少しくらい楽しんだって罰はないはずだ。

僕は少しだけ早歩きで観客席に向かった。

——なんか、よくよく考えたら、かなりのご都合主義だよな、これ……

なんて事を、少し考えながら。
いや、普通そう思うよね？

まあ、それはともかくとして、僕は観客席に戻るのだった——

T o b e c o n t i n u e d

おまけ

「本日の最強カードは『スーパervイス』だ。デュアルモンスターを再召喚した状態にできるうえ、墓地に送られた時、墓地の通常モンスターを一体、特殊召喚する事ができるぞ！」

「……なんか、見切り発車過ぎないか、これ……」

TURN・01 超常現象発生！ いきなりのデュエル！（後書き）

誤字または脱字、そしてデュエルにおけるミスなどがあれば、指摘
してくださいとありがたいです。

では、以上、YBFでした。

2011・6・14 誤字訂正

TURN・02 プライドをぶち壊せ！ ダーク・ヴァルキリア（前書き）

実はある程度までストックがあります。

……が、訂正を入れながらの投稿、かつ執筆時間不足により、更新は不定期になるかと。

できる限り定期的に更新できるようにがんばります。

Y B F

TURN・02 プライドをぶち壊せ！ ダーク・ヴァルキリア

あれから数週間。ついにデュエルアカデミアの地を僕は踏む。

結局、僕はトリップしたまま。戻る手がかりはなし。

なら、楽しむしかない。と、結論付けている。

と、いうか、だ。あの後、カバンの中から自分の財布を見つけ、その中に異様なほど金が入っていた。

よって、帰りはタクシーを見つけ、学生証に書かれた住所までと運転手に言って、自宅に辿り着いた。

自宅周辺はどうも現実とそう変わり映えはなかった。

とはいえ、現実世界とは大きく違うのは、普通にデュエルモンスターズが流行していることだろうか。

うん、だつてさ、そこらかしこの公園で、プレイマットを敷いて子供達が「デュエル！」って叫んでいるし。

俺の知っている地元じゃ流石にここまで熱狂的に流行してなかったよ。遊戯王。

閑話休題。

そんなこんなで、帰宅した僕は自室に戻ると、これまた何枚かのカードを入手。これもデッキ補強用に使う事にして、今日を迎えた。巨大なヘリでデュエルアカデミアのある南の島に運ばれ、そして僕は黄色の制服の袖を通した。

予想通りとは言え……なんか、空気になりそうな色だ。

まあ、楽しめるのであれば、という但し書きはつくものの、空気で構わない。某王子風に言えば「空気で構わんがな」かな。ニユアンスが違いすぎるが。

まあ、とりあえず、だ。

楽しむために、色々と奔走するかな。

TURN - 02

プライドをぶち壊せ！ ダーク・ヴァルキリア

試験の結果、僕はラー・イエローに所属する事になったらしい。
テンプレの場合は基本的にオシリス・レッドのような気がするの
だが、僕はどうかやらテンプレではなかったらしい。……なんか、代
わりに空気になりそうだけど。まあ、それは放置しておく。

ラー・イエロー寮の自室は二人部屋だったが、イエローの生徒が
ちょうど奇数だったためか、僕は一人だった。……まあ、その方が
のんびりできるから、ちょうどいいのだが。

カバンの中に詰め込んだカードを部屋の押入れに収納する。デッ
キ補強に使う可能性があるとはいえ、しばらくは自宅で弄ったデッ

キでやっていく事にする。

さて、と。現在時刻は午後六時。新入生の歓迎会は午後七時。確か、アニメ第二話のイベントは歓迎会直前と歓迎会後の深夜だったはず。

デュエル場の場所は生徒全員配布のPDAで調べる事ができるから、一応、行ける。よし、介入しよう。面白そうだし。

とりあえず、荷物の整理を終えた僕は部屋を出る。すると、廊下には後の空気である試験番号1番がいた。

ええと、確か名前は……。ダメだ思い出せない。
と、思っていると、向こうから話し掛けてきた。

「君は……試験で後攻ワンターンキルをした受験番号11番……だったっけ？」

「ああ、僕が受験番号11番、玄咲楓だけど……君は？ 受験番号1番なのは覚えているんだけど……」

「お、そうだった。名前を聞く時はまず自分から、だったな。俺は三沢大地^{みさわ だいち}。君のデュエル、よかったよ。君とならいいデュエルができそうだしね」

「そりやどうも。勿論、負ける気は一切ないけどな」

いいデュエル——つまり、自分が負けるわけがないという自信があるからこそこの宣言だろう。

だけど、僕だって負けるつもりはない。……と、いうか三沢さん、確か、アニメだと相手のアンチデッキを組むデュエリストだったよな。

そりや、負けるわけがないか。……不運さえなければ、という但し書きこそつくけれど。

「ま、そうだよな。負けるつもりでデュエルなんて、こっちもゴメ

んだ」

「そりや当然だろ。じゃ、僕は少し校内探索しようと思ってるから」
「わかった。歓迎会は午後七時だから気をつけるよ」

「そのくらい、わかってるって」

僕は三沢に別れを告げ、デュエル場へと向かう。

道中、不思議と誰にも会う事無く、そのままデュエル場に辿り着き、「ビークワイエット」と誰かが言った。記憶が確かなら、その台詞を言ったのは――

「諸君、はしゃぐな」

「万丈目さん……」

オベリスク・ブルーの制服に身を包んだ三人の男子生徒と、オシリス・レッドの制服を着た二人の男子生徒。間違いない。

後にサンダーと呼ばれるネタキャラとなる万丈目準とその取り巻き二名、そして主人公である遊城十代とその子分、丸藤翔。……間違いない。アニメ第二話の状況とあまりにも類似している。

よし、突入だ。

「ソイツ、お前達よりも――」

「ああ、そうだな。オベリスク・ブルーのプライドにすぎりつくテメエら三人よりも強いよな」

原作介入の始まりだぜえ！ メ・ツエエエエエル！！

あ。いけね。テンションが上がりすぎた。

まあ、いいや。

「――なんだと……！？」

「中等部から生え抜き？ バカバカしい。そもそも、ブルーだから強いなんて事はないだろ？ 強いやつが強い。当然の話だろ？」

「お前！ 万丈目さんになんて口をおつ！」

「そうだ！ ラー・イエローの分際で！」

「……そうか。やけに調子に乗っているなと思えば、実技試験で試験官に後攻ワンターンキルをした男と、手加減されてたとはいえクロノス教諭を倒した男か。」

「実力さ」

十代が拳を握り締めながらそう答える。

うん、僕はどうしよう。まあ、いいやアレは流石に手札がよかっただけだし。とはいえ、こいつら程度に負けるような僕ではないと言いつける。だからこそ、無言で万丈目を睨む。

そんな十代の言葉を聞き、僕の様子を見て、万丈目は鼻で笑う。

「その実力、ここで見せて欲しいもんだな」

「いいぜ」

「別に構わないけど？」

とりあえず、挑発しまくる。この頃の万丈目は何もかもが微妙だしな。しかも、オベリスク・ブルーのプライドにすぎりつく馬鹿野郎だ。

この時点なら、僕はいくらでも彼とその取り巻きを挑発しまくる。そんな事を考えていると、「あなた達。何してるの？」と、女性の声が聞こえた。

うん、アニメどおりだ。今、ここに来たのは――

「ああ、キレイな人……」

「天上院くん。いやあ、この新入りがあまりに世間知らずなんですね。学園の厳しさを少々教えてさしあげようと思って」

遊戯王GXのヒロインの一人。天上院明日香^{てんじょういんあすか}。中等部からの生え抜きで、GXのメインキャラクターに定着するくらいの実力の持ち

主。……あまり強いイメージがないけど。

それにしても、美女だな。明日香は。ただ、美少女ではないのが残念である。自分のストライクゾーンからは少し外れてる。

……まあ、どうでもいいけど。フラグなんて立てないし、立つはずもないし。

「そろそろ寮で歓迎会が始まる時間よ」

「引き上げるぞ」

明日香のその一言で撤退する万丈目。

……うん、この頃から万丈目は明日香に対して恋心を抱いていたのだろうか。

まあ、どうでもいいか。

「あなたたち。万丈目君の挑発に乗らない事ね。あいつら、ろくでもない連中なんだから……っ！」

うわ。怖い。なにその顔。まじ怖いんですけど。

……ってのは冗談だが……うん、確かに怖い。よっぽど嫌われてるんだな万丈目。こりゃ、万丈目の恋は成就するわけないな

さて、時計を確認して、と。うお、午後六時四十五分か。……そろそろ寮に戻るべきか。

「とりあえず……そろそろ僕らも寮に戻って歓迎会に参加するべきかな。あ、自己紹介がまだだな。僕は玄咲楓。よろしく」

「俺は遊城十代。よろしくな！」

「ボクは丸藤翔ツス」

「天上院明日香よ」

本当に軽い自己紹介。それだけを済まし、僕はラー・イエローの寮へ戻り、歓迎会に参加した。

歓迎会が終わったその夜。

突如PDAが鳴り出し、メールを受信した事を僕に知らせる。
何でこっちのアドレスを知ってるのか。と、いう疑問はあるが、
関係ない。

さて、行こう。デュエル場へ。

僕が楽しむために。

デュエル場の前で十代と翔を合流し、中に入る。そこには万丈目
とその取り巻きが待ち構えていた。

「よく来たな110番に11番」

「へへっ、デュエルと聞いちゃ来ない理由はないぜ」

「そのプライドをぶち壊してやろうと思ってね……っ」

僕の趣味の一つは、自信満々で他人を見下すムカつくヤツを思う
存分やつつける事だ。

そして、僕と十代は歩を進める。

翔はそんな十代を止めようとするも、今更止まる十代ではない。
勿論、僕が十代の立場でも止まるつもりはない。

どうやら、今夜のデュエルは十代vs万丈目と僕vs取り巻き（
メガネをかけてない方）の同時進行らしい。

……同時進行で。まあ、いいけどさ。

「お前の実力はオベリスク・ブルーでは通用しないと教えてやる！」
しかも、向こうは向こうで凄くテンション上がっているし。

こういう人を見ると、なぜか萎えるんだよな。さっきまでテンシ
ョン上がっていたはずなのに。

うーん。熱くなった人を見ると、逆に冷めてくるのって、よくあ
る現象な気がする。

まあ、いいや。

「あ、そ。それじゃあ、がんばれば？」

「ハッ！ そんな態度でいられるのもいまのうちだぞ！ アンティ

ルールだからな。俺が勝つたらお前の『真紅眼の黒竜』は俺のものだ！」

まあ、レアカードである『真紅眼の黒竜』が欲しいのはわかるけどさ。そんなに欲しいのかよ。

ステータス見ればわかるだろ。そこまで凄くないんだから。ロマンはあるけど。

まあ、ロマンだけでデッキに入れている僕が言えることじゃないけど。

と、いつか勝手に勝利宣言しないでほしい。そういうヤツを見ると結構イラッて来るし。

「だんまりか？ は！ 泣いて謝るなら今のうちだぞ？ ま、その代わり『真紅眼の黒竜』は俺のものだけだな！」

やべえ、何このジャイアリズム。結構どころじゃない。かなりイラッて来たんだけど。

……もういい。目の前のヤツはぶっ潰す。

「勝手に言ってる。とつとと始めてテメエに早く絶望をみせてやるよ」

「お前え……ッ！ 減らず口をおッ……！ デュエル！」
「……デュエル」

玄咲楓 LP 4000

取り巻き LP 4000

「先攻はイエロー！ てめえに譲ってやるよ！」

正直、後攻の方が個人的に好きなのだが……。

だが、今回の初期手札はワンキルできそうなものではない。ここは大人しく、先攻で行くでしょう。

「ドロー」

うーむ。どうも攻め手に欠く。

相手をぶっ潰すは決定なのだが、この手札で潰すのは無理かな…

…。

「僕はモンスターをセット、カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「どうした？ 攻めてこないのか？ ならばこっちから攻めるぞ！
ドロー！」

なんか、勝手にどんどんテンションが上がってないか？

……とりあえず。コイツのデッキはなんだろう。取り巻きつて要
はモブキャラなわけだし、そんなに強いデッキではなさそうだが。

「俺は『ゴブリンエリート部隊』を攻撃表示で召喚！」

ゴブリンエリート部隊

ATK2200 DEF1500

うおーい。コイツ、自分がエリートとも思ってるのか？

いや、思い込んでそうだな。しかも、ゴブリンって。攻撃後に守
備表示になるし。

まあ、どうでもいいか。

目の前に現れる鎧を装着したゴブリンたち。なんだかシールドだ。
うん。似合ってたねえよ……。

「さらに！ 『^{デュアルサモン}二重召喚』を発動。この効果により、もう一度通常

召喚を行える！ 俺はもう一枚の『ゴブリンエリート部隊』を召喚
するー！」

うわあ。アニメでは見るけど実際のデッキにはなかなか入らない『二重召喚』来たー！

まあ、【デュアル】だと再召喚に使えるから入る可能性はあるけどさあ。

ふと隣を見てみると、万丈目が『ヘル・ポリマー』を発動していた。

うん、このタイミングで天上院が来たから……タイムリミットが迫ってきてる、って事か。

……それまでに終わらせてプライドをへし折ってやろう。

「まずは、お前のその忌まわしいモンスターを消し去ってやる！一枚目の『ゴブリンエリート部隊』でそのセットモンスターを攻撃し！」

ゴブリンが統制のとれた動きを見せ、セットモンスターへと迫る。

仮面竜

ATK1400 DEF1200

「セットモンスターは『マスクド・ドラゴン仮面竜』だ」

伏せられていたカードが開き、『仮面竜』が姿を現す。だが、目の前に迫ってきた『ゴブリンエリート部隊』に気づいて防御姿勢をとるも、すぐに破壊される。

「破壊され、墓地に送られた『仮面竜』の効果発動。デッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスターを特殊召喚する。僕はもう二枚目の『仮面竜』を守備表示で特殊召喚」

「ち、小癪な真似を……！二枚目の『ゴブリンエリート部隊』で

『仮面竜』を再び攻撃！」

再び迫り来る統率がとれたゴ布林たち。為す術もなく『仮面竜』は破壊される。

「『仮面竜』の効果。デッキから再び『仮面竜』を特殊召喚する」
「ち、ライフポイントは削れなかったか……。『ゴ布林エリート部隊』は攻撃終了後、守備表示となる！ カードを一枚伏せて、ターンエンド！」

どうやら、向こうは苛々しているらしい。さて、と。そろそろ仕上げと参りますか。

「僕のターン、ドロー」

「この瞬間、リバーiscardオープン！」

いきなり、取り巻きが叫んだ。

場にいるのは守備表示となった『ゴ布林エリート部隊』と、いう事はまさか。

「畏カード『最終突撃命令』発動！」

やっぱりか。このカードの効果で守備表示モンスターは攻撃表示となる。攻撃力は高いが守備力が高くないゴ布林シリーズのサポートカードとなる永續畏。

まあ、そんなのがあった所で、今引けたカードを見る限り、僕がそのまま勝てそうだ。

って、翔。「え？ 『最終突撃命令』？」と首を傾げるなよ。『最終突撃命令』くらい知つとけよ。

「ハハハ！ これで俺の『ゴ布林エリート部隊』は再び攻撃表示

となる！ 攻撃力2200の『ゴブリンエリート部隊』を倒すには、お前の『真紅眼の黒竜』しかないよなあ？ テメエの雑魚モンスターじゃ、俺に勝てないんだよ！」

——雑魚、だと？

コイツはバカだ。アホだ。

僕のカードを全然わかつちやいない。

「壁モンスターの『仮面竜』も攻撃表示となつちや、テメエのライフも、もうすぐゼロで、『真紅眼の黒竜』もすぐ俺の物になる！ テメエみたいな女男が持つていいレアカードじゃあねえんだよお

！」

「——」

今、コイツは言っではいけない事を言った。

女男、だと……！？

は、そっちがそのつもりなら、本当にへし折ってやる。

……ああ、もう。中二病過ぎないようにがんばってきたけど、こうなったらもういい。

潰すことだけを考える。

——それに、僕のことを“女男”と呼んだやつは、現実世界にいた頃の話ではあるが、例外なく、ぶちのめしたからな。それは、こちでも例外ではない……！！——

「通常魔法『闇の誘惑』発動。カードを二枚ドロし、手札の闇属性モンスターを一枚除外する。闇属性モンスターがいなければ手札をすべて捨てる。二枚ドロ！。手札の『ダーク・ヴァルキリア』を除外」

「ハ！ 雑魚モンスターをコストに手札補充か。確かに、雑魚にはその程度しか使い道はねえよなあ！？」

無視だ。

「……そして……手札から装備魔法『D・D・R』を発動。除外されているモンスターを自分フィールド上に特殊召喚し、このカードを装備する。『闇の誘惑』で除外した『ダーク・ヴァルキリア』を特殊召喚」

ダーク・ヴァルキリア

ATK1800 DEF1050

目の前に現れる『ダーク・ヴァルキリア』。

どこことなく、相手プレイヤーである取り巻きを睨みつけているように見える。まあ、雑魚呼ばわりされたんだから、仕方がない気がするが。

「装備魔法『スーペルヴィス』発動。これで『ダーク・ヴァルキリア』は効果モンスターとなり、魔力カウンターを一つ載せる」

ダーク・ヴァルキリア

ATK1800↓ATK2100

「だが、攻撃力は2100！ゴブリンエリート部隊には届かない！残念だったな！」

「残念なのはお前だ。リバーズカードオープン、永続罠『漆黒のパワーストーン』を発動。このカードに魔力カウンターを三つ載せ、ターンに一度、魔力カウンターを他のカードに載せかえる。『ダークヴァルキリア』に載せる」

「……な、こ、攻撃力2400だと！？」

「さらに、もう一枚のリバーズカードもオープン。こいつも『漆黒のパワーストーン』だ。魔力カウンターを一つ、『ダーク・ヴァルキリア』に載せる」

ダーク・ヴァルキリア

ATK2100 ↓ ATK2700

これにより、『ダーク・ヴァルキリア』の攻撃力は2700となったが……注目するべきはそこではない。

「『ダーク・ヴァルキリア』の効果。魔力カウンターを一つ取り除き、モンスター一体を破壊する。僕は二つ取り除き、『ゴブリンエリート部隊』二体を破壊する」

すると、『ダーク・ヴァルキリア』から純白の奔流が放たれ、それが『ゴブリンエリート部隊』を包み、『ゴブリンエリート部隊』は二体とも粉々に砕け散った。

ダーク・ヴァルキリア

ATK2700 ↓ ATK2100

「あ、あぁ……俺のフィールドがガラ空きだと……！？ い、いや、だが俺のライフは4000もある。二体の攻撃をくらっても、俺のライフは残る！ 体勢を整えれば、この程度——！」

「——何勘違いしているんだ？」

「はぁ！？」

「僕は通常召喚を行っていない。僕は手札から『サファイアドラゴン』を通常召喚！」

サファイアドラゴン

ATK1900 DEF1600

攻撃力1900のドラゴン族通常モンスター。『ダーク・ヴァルキリア』と『サファイアドラゴン』のダイレクトアタックでちょうどライフはゼロだ。

「『ダーク・ヴァルキリア』と『サファイアドラゴン』でダイレクタアタック！ テメエが雑魚と罵ったモンスターの攻撃を食らえ！」
「ひいっ！？」

恐怖に染まる取り巻き。だが、僕は攻撃をやめない。

『サファイアドラゴン』は頑丈そうな爪で取り巻きを切り裂き、『ダーク・ヴァルキリア』はやっぱりといつかなんとか純白の奔流で取り巻きを包み込む。

目の前には悲鳴を上げる取り巻き。……ふう、満足した。

それにしても……ソリッドビジョン、過激だな。

なんか、僕の感情を汲み取って、空気を読んだ演出をしてくれている感じがする。……うん。どういう仕組みなんだろうか。

玄咲楓 LP4000

取り巻き LP0

てか、『漆黒のパワーストーン』を遊び心でデッキに入れてみたのだが、それがこつも活躍するとは思わなかったな。

普通なら、使う機会を失って、手札で腐るはずなのだが。

「お前の負けだよ、ブルー。アンティは受け取らないでよくよ。一応、禁止されているしね」

「チツ…… テメエ、よくもお……っ！」

取り巻きは凄い形相でコツチを睨んでいる。うん、つか、そんな事している暇が合ったらカードの性能をちゃんと把握しろよ。全く。

そんな事を思っていると、「ガードマンが来るわ！」という明日香の声がデュエル場に響き渡る。

「万丈目さんヤバいつすよ！」

「今夜はここまでだ。俺の勝ちは預けておいてやる」

「まだ勝負は終わっちゃいないぜ！」

そして、隣ではアニメどおりの展開。

万丈目がデュエル場を去ってからも、十代は動こうとしない。おいおい、アンティールや夜間の施設使用は校則違反、つまり退学の危機だつてのに。

結局、全員でデュエル場から撤退する事ができた。

翔だけで十代を動かすのは難しいと思い、僕も協力した。

取り巻きに“女男”と言われるくらい僕の顔は女顔で、身長も低い”男の娘”ではあるが、一応、筋力には自信がある方だ。二人がかりでなら、十代を動かすのは苦じゃない。

「全く、世話のかかる人ね」

「ちえ、余計な事を」

デュエルが中断してしまったのがそんなに嫌だったのか、十代の機嫌は悪い。

「ありがとう明日香さん。それと、楓君もありがとうッス。ボク一人だとアニキを運べなかったかもしれないし」

「気にするな」

あれ？ でも、そう言えばアニメだと翔だけで十代を動かしていたような。

……どうでもいいか。

「どう。オベリスク・ブルーの洗礼を受けた感想は？」

「ただのプライドにすぎりついた雑魚だな。あの取り巻きが特別弱かった可能性もあるけど、な」

「まあまあかな。もう少しやるかと思っただけだね」

自信満々な様子の十代。そりやそうだろう。起死回生の一枚が、最後のドローで手札に加わったのだから。

「そうかしら？ 玄咲くんはともかくとして、あなたは邪魔が入ってなかったら、今頃アンティルールで大事なカードを失う所じゃなかったの？」

だが、それを知らない明日香はそうとしか言えない。十代のライフポイントは残り550で、手札は一枚。よほどの事がない限り、次のターンを持ちこたえる事はできない。

しかし、十代にはできた。

「いや、あのデュエル、俺の勝ちだぜ」

そう言つて十代は明日香に一つのカードを見せ付ける。

——『死者蘇生』。墓地のモンスターを特殊召喚する魔法カード。

それで、『E・HERO フレイムウィングマン』を特殊召喚し、攻撃すれば十代の勝ち。

OCGでは“融合召喚でしか特殊召喚できない”とテキストにあるため不可能だが、こっちはそうではない。よって、あのデュエルは十代の勝ちなのだ。

それに気づいた明日香は息を呑む。

その様子を見て満足したのか、十代はその場から去る。それに気づいた翔は「あ、アニキー」と呼びかけながら追いかける。

残されたのは、僕と明日香。

「それじゃ、僕も帰るよ。そろそろ寝て明日の最初の授業に備えた方がよさそうだしね」

「そうね。また明日。玄咲くん」

「おう、またな明日香」

それにしても。十代を見る明日香の目が思いっきりフラグ臭がしたんですけど。

うーむ。主人公と言うのはチートドローだけでなく、フラグ体質も持つものなのか。

……僕には関係のない話だな。

そんな事を考えながら、僕は寮に戻った。

T o b e c o n t i n u e d

おまけ

「今回の最強カードは『ダーク・ヴァルキリア』だ。再召喚した後、他のカードで魔力カウンターを載せれば、相手フィールド上のモンスターを一掃できるぞ!」

「今回のようにわざわざ『漆黒のパワーストーン』を使ってまで溜めるのはただのロマン」

TURN・02 プライドをぶち壊せ！ ダーク・ヴァルキリア（後書き）

誤字または脱字、そしてデュエルにおけるミスなどがあれば、指摘
してくださるとありがたいです。

追記

2011.9.24

『D・D・R』のルビのミスを修正。

強引にアニメ第二話のイベントに介入してから数日が経過した。なんとなくではあるものの、ラー・イエローでの生活に慣れてきたような気がする。

通常の授業とデュエルの授業。

前者はトリップ前に学習した内容と同一だったため、どうにかなる。つか、正直楽勝である。

後者は……うん、言わずもがな。トリップ前の世界じゃ遊戯王カードをやっていたら誰でも知っているような内容ばかりだ。わかって当然だ。

にも拘らず、丸藤翔……なぜわからない……。あれか？ 前者の方の成績で合格した感じだろうか。

いや、だとしたら十代はもつと謎過ぎる。結構頭がよくないキャラクターとして描かれているし、カードの効果を知らない事が多いのに。

いや、あれか？ 四択問題で偶然の正解が結構多かったからか？ 二人ともなかなかチートドロを見せ付けるときがあるし……うん、思い当たる節はそれくらいしかないなあ……。

閑話休題。

ところで。錬金術の授業って、何なんだろう。いや、聞いている面白く言えば面白いんだけど、何に役立てればよいのだろうか。それが一番の謎？

何はともあれ。そんな日常に慣れてきたからか、アニメの事も徐々に忘れつつある最近。

——イベントは、忘れた頃にやってくる。

すぐ間近に迫っているイベントの事を忘れて、明日の授業の準備

がてら制服からパジャマ（もとい、半袖短パン）に着替えようとした、その時だった。

PDAが急に鳴り出した。

あれ。万丈目のイベントは終わらせたあと、そんなイベントあったっけか。

……ああ、思い出した。丸藤翔誘拐事件か。うわあ、どうでもいい。でも、行かないと後日何か言われそうだなあ。——と、いうよりもむしろ、イベント介入の貴重なチャンスだ。逃すわけにはいかない。

とりあえず、その記憶で間違っていないかを確かめるために、PDAを開いて確認する。

『丸藤翔を預かっている。返して欲しくば女子寮に来られたし』

それにしても、非通知かつ声も加工って……。どうやったらできるんだろうか。確か、明日香が十代と一戦交えたから呼び出したのだから、実行犯も明日香のはず。

……優等生だから色々教えてもらっているのだろうか。まあ、今はどうでもいい。

とりあえず、イベントに参加するために僕は制服に着替えなおし、デッキだけを持って行く事にした。

TURN - 03

水上決闘！？ 楓VSジュンコ

女子寮の湖の前に着いたのは、同じ音声メールを受け取ったはずの十代とほぼ同時だった。

「楓！ お前も呼び出されたのか？」

「そうだよ。……これを漕いで女子寮に行く、って事が……？」

湖にはボートが浮かんでいた。うん、アニメでも確か——うん、ボートで十代が女子寮に行っていたような気がする。

「おっし、楓！ 翔を助けるために一緒に行くぞ！」

「オツケー。呼び出されたのは僕も十代も同じだしな」

そして、十代と僕は一緒にボートを漕いで、女子寮の前になんとか辿り着いた。

そこにいたのは、翔と、それを確保している女子二名と天上院明日香だった。

確か、女子二名の名前は——そう、枕田ジュンコと浜口ももえ、だったか。

「翔！ コレはどういう事なんだよ？」

「それが、話せば長いような、長くないような——」

「——コイツがね、女子寮のお風呂を覗いたのよ」

「なんだって？」

「覗いてないって！」

「……翔、よっぽど欲求不満だったのか？」

「違っって！」

ちよっとからかおうと思って言ってみる。うん、やっぱり否定してきた。

まあ、僕が同じ立場であれば、否定するだろうし、当然といえば

当然なのだけど。

「コレが学校にバレたら、きつと退学ですわ」

アニメを見る限り、翔はそこまで辿り着けていないのだが——うん、可能な所まであともう数メートルだよな。アウトだよな。その時点で。まあ、退学はやりすぎな気がする。

まあ、心情としては退学にしたいのかもしれないが。まあ、凄くどうでもいい。僕にとっては。

「ねえ、あなたたち。私たちとデュエルしない？」

“たち”。アニメには僕はいないから、その分、追加したのだから。

うん、この流れだと僕もデュエルする事になりそうだ。トリップ物の定番でもあるし。

「もし私たちに勝ったら、風呂場覗きの件は大目に見てあげるわ」

「だから覗いてないって言ってるのに！」

「なんだかよくわからないけど、まあいいや！ そのデュエル、受けて立つぜ！」

で、十代は勿論デュエルとならばそれに乗る。僕は翔の退学なんてどうでもいいがイベント介入的にはデュエルしたいし、勝負に乗るとする。

とりあえず、確認だけは済ませよう。

「あなた“たち”って言った事は、僕もデュエルするという事ですよね？」

「ええ。そのつもりよ。……そうね。私たちは三人、あなたたちも三人。二本先取のチーム戦はどう？」

「例え負けたとしても、退学は翔だけですよね？」

「……そうね。あなた達二人は私たちが呼んだだけだし」

「ええ?! そんな!?!」

「わかりました」

確認は済んだ。とりあえず、デュエルディスクを一台貸してもらい、初戦を担当する十代がそれを装着し、僕がボートを漕いで、湖

の上でデュエルが始まった。

なんで、湖の上にしたし。地上でいいじゃん。と、思ったが――
口に出さない事にした。

「――そして、相手プレイヤーにダイレクトアタックだ！ “ボル
ティック・サンダー”！」

巨大な人型モンスターでエレメンタルE・HEROの一種、『E・HERO
サンダージャイアント』が十代の相手プレイヤー、明日香にダイレ
クトアタックを決め、アニメどおり十代は明日香に勝利した。

これで、一本先取。さて、二戦目は僕が行く事にしよう。

「いいデュエルだったな」

「おう、次は楓、翔の為に次で決めてやれ！」

「可能ならね。まあ、負ける気なんてさらさらないんだけどさ」

僕はそういつて十代と位置を交換。船の先頭に立つ。

相手は枕田ジュンコ。

……なんか、どこかの二次創作で読んだ気がする。……気にしな
い事にする。

それにしても、向こうはとてつもなく臨戦態勢である。そんなに
覗きが嫌いなのか。いや、覗きが嫌いじゃない女子って少数派だと
思っけれどもさ。と、いうかいるの？

「さっさと構えなさいよ！」

「りょーかい、っーか苛々しないほうがいいんじゃないの？ 翔を
退学にするには僕に勝たなきゃいけないわけだしさ」

「それを言うならアイツを退学にしたいくないなら、私に勝たなきゃ
いけないのよ？」

む。これは平行線になりそうだ。

「じゃ、始めるとしよう」

「デュエル！」

「デュエル！」

玄咲楓 LP4000

枕田ジュンコ LP4000

ほぼ同時に叫び、カードを五枚ドロ。そして、先攻は相手――枕田ジュンコだ。

確か、アニメでは『マーメイド・ナイト』を使用していたため【水属性】だろうと推測できるにも関わらず、タッグフォースでは【ハーピィレディ】を使用していたんだっただか。

正直な話、普段は伏せカードを多用しない自分からすれば、前者でも後者でも構わない。まあ、どちらかといえば前者の方が楽かもしれないが。

「アタシのターン！ ドロー！ 『マーメイド・ナイト』を攻撃表示で召喚！ さらにフィールド魔法『海』を発動！ これで『マーメイド・ナイト』の攻撃力は1700になり、一ターンに二度の攻撃が可能になるわ！」

マーメイド・ナイト

ATK1500 DEF700

ATK1500 ↓ ATK1700

DEF700 ↓ DEF900

「カードを一枚伏せて、ターンエンド！」

『マーメイド・ナイト』を場に出した、という事は普通に『海』と水族モンスターを使ったビートデッキだろう。これで、【ハーピィレディ】の線は消えた。

正直、ただのビートデッキならばこちらに分がある。と、いうか『海』よりも『伝説の都 アトランティス』の方がヤバい気がする。水属性モンスターのレベルが下がることで、主要のロックカード『グラヴィティ・バインド - 超重力の網 -』や『レベル制限B地区』

をすり抜けて攻撃してくるからだ。

コッチの主軸はレベル4以上の『ダーク・ヴァルキリア』や『ダーク・グレファアー』。レベル4以上のモンスターを対象とするロツクカードは鬼門なのだ。

だけど、今回、枕田が使用しているのは『海』。デッキにそもそも『海』しかないのか、それともそこまで考えていないのか。はたまた『伝説の都 アトランティス』を持ってないのか。

まあ、判断材料が少なすぎる。じっくりと考えていく事にしよう。
「僕のターン、ドロー！」

さて、と。今回の初期手札は正直当たりではない。ここは、リクルーターである『仮面竜』で防御とデッキ圧縮をするしかないだろう。

「モンスターをセット、カードを一枚伏せて、ターンエンド」

「何もしてこないの！？ だったらアタシから攻めさせてもらっわ！ アタシのターン、ドロー！」
「マーメイド・ナイト」を攻撃表示で召喚！」

マーメイド・ナイト

ATK1500 DEF700

ATK1500 ↓ ATK1700

DEF700 ↓ DEF900

二体目の『マーメイド・ナイト』。『海』がフィールド上にあることで二回攻撃が二体分。つまり、合計で四階攻撃となる。ライフポイントが4000しかないアニメの世界では、結構恐ろしい状態だ。

と、いつか今がその状態だ。

僕のデッキにはリクルーターは『仮面竜』三枚のみ。『仮面竜』の効果の対象になるカードは『ボマー・ドラゴン』と『黒竜の雛』

のみ。

だが、戦闘によって自身を破壊したモンスターを破壊するという優秀な効果を持つ『ボマー・ドラゴン』は二枚とも手札。つまり、この状況では特殊召喚できない。くそ、デッキ圧縮は高速で進むけど、リクルーターをこんなに早く使い切るだなんて……！

「バトル！ 『マーメイド・ナイト』でセットモンスターに攻撃！」「セットモンスターは『仮面竜』！ デッキから攻撃力1500以下のドラゴン族、二体目の『仮面竜』を守備表示で特殊召喚する！」

仮面竜

ATK1400 DEF1200

「ち、面倒な……！ 『マーメイド・ナイト』の二回目の攻撃！」「『仮面竜』の効果、三体目の『仮面竜』を守備表示で特殊召喚！」「でも、四枚目はないでしょ！？ 二体目の『マーメイド・ナイト』の攻撃！」

「『仮面竜』の効果で『黒竜の雛』を守備表示で召喚する」

黒竜の雛

ATK800 DEF500

『真紅眼の黒竜』を小さくしたような、小型の竜。

「二体目の『マーメイド・ナイト』、二回目の攻撃！」

だが、竜と言えどまだ雛。『マーメイド・ナイト』の攻撃にあっけなく破壊される。

「これでアンタのフィールドはガラ空きよ！ 次のターンで終わらせてあげるわ！」

……いや、そんな事言われても。

まあ、いいや。今はドローするのみだ。

「僕のターン、ドロー！」

ドローしたカードは……。ん、待てよ。リバースカードを使えば……！！

「リバースカードオープン！ 永続罫『リビングデッドの呼び声！』発動！」

「でもアンタの墓地には攻撃力の低い『仮面竜』と『黒竜の雛』しかないじゃない！」

「まあ、見てればわかるっての！ 『黒竜の雛』を特殊召喚し、『黒竜の雛』の効果を使う！」

「『黒竜の雛』の効果！？ そんな小さい竜に何ができるっての！？」

おいおい。仮にもレアカードのサポートカードなのに……。まあ、いいや。今の僕のテンションは有頂天、カードの効果を説明してやる……！！

「『黒竜の雛』の効果。このカードを墓地に送る事で、手札から『真紅眼の黒竜』一体を特殊召喚する……！」

「なんですって！？」

「来い！ 『真紅眼の黒竜』！」

テンションが上がった僕は右手を大きく手を上げる。そして、それとタイミングを合わせたように『真紅眼の黒竜』が目の前に現れた。

真紅眼の黒竜

ATK2400 DEF2000

「こ、これが……『真紅眼の黒竜』……！？」

「さらに、手札から通常魔法『闇の誘惑』を発動！ 二枚ドローして闇属性モンスター『ダーク・ヴァルキリア』を除外、そして装備魔法『D・D・R』を発動！ 手札を一枚捨てて、さっき除外した『ダーク・ヴァルキリア』を攻撃表示で特殊召喚！」

ダーク・ヴァルキリア

ATK1800 DEF1050

目の前に現れる黒翼の少女、『ダーク・ヴァルキリア』。『真紅眼の黒竜』とともに相手プレイヤーである枕田ジュンコにプレッシャーを与える。

「そして、装備魔法『スーペル・ヴィス』を発動、『ダーク・ヴァルキリア』に装備して『ダーク・ヴァルキリア』の効果発動！ 魔力カウンターを載せ、それを取り除く事で『マーメイド・ナイト』一体破壊！」

これで、枕田の場合は『マーメイド・ナイト』一体。手札のカードにもよるが、恐らく懸念しているカードはない。この勝負、もらった……！

「そして、手札から『ボマー・ドラゴン』を攻撃表示で通常召喚！」

ボマー・ドラゴン

ATK1000 DEF0

爆弾を抱えた青いドラゴン。それが僕の目の前に現れる。さあ、

行こう！

「バトル！ 『ボマー・ドラゴン』で『マーメイド・ナイト』を攻撃！」

「間違ったわね。攻撃力1000のモンスターで攻撃力1700の『マーメイド・ナイト』を攻撃するなんて！」

「『ボマー・ドラゴン』の効果。このカードが戦闘によって破壊され墓地に送れた時、このカードを破壊したモンスターを破壊する。そして、このカードが攻撃した場合、お互いのプレイヤーが受ける戦闘ダメージはゼロになる……！」

「……そ、そんな！？ と、いう事は……！？」

「『マーメイド・ナイト』は『ボマー・ドラゴン』の効果により破

壊される！」

それにしても、ヤバいな。テンションが上がりすぎだ。……ああ、もういい。中二病満載かもしれないが、このテンションのまま突っ切ってやる！」

……ああ、そうだ。せつかくテンションが上がっているんだ。技名も叫んでやるうじゃないか！

「行け、『ボマー・ドラゴン』！ “スーサイド・エクスプロージョン”！」

自爆特攻し、相手を道連れにする。

すまない。『ボマー・ドラゴン』。だが、『ボマー・ドラゴン』のおかげで――

「――これで、お前のフィールドはがら空きだ！ このターンで勝負を決める！ 『ダーク・ヴァルキリア』、『真紅眼の黒竜』でダイレクトアタック！」

攻撃力2400と1800、合計4200ポイントのダメージ。つまり、僕の勝ちだ。

まず『ダーク・ヴァルキリア』の純白の奔流で枕田が悲鳴をあげ、奔流が止んだその瞬間に、『真紅眼の黒竜』がトドメの“黒炎弾”を放った。

ちよ、『真紅眼の黒竜』！ なんか、この前のデュエルよりも攻撃がデカくないですか！？ テンションでも上がってんのか！？ いや、き、気のせいだよな、うん。

玄咲楓 LP4000

枕田ジュンコ LP0（200のオーバーキル）

とにかく、だ。

僕のトリップ後のデュエルはここまで三戦全勝、どれもがノーダメージと、スタートダッシュに成功したのだった。……うん、どこかで失速しそうだなあ……これ……。

「約束通り翔は連れて帰るぜ」

二本先取した事により、翔は見逃される事となった。まあ、自分も楽しめて、翔も退学を免れたわけだし、めでたい事だ。

「どうぞ、約束は守るわ。今日のことは黙っててあげる」

「フン！ マグレで勝ったからといって、いい気にならないことね！」

「よしてジュンコ」

「でも明日香さん……」

「負けは負けよ。見苦しいことはしないでね」

それにしても、明日香はともサバサバしてる。うーん。こういう人と勝負したら、勝っても負けてもいい気分になれそうだ。……逆に。枕田はなあ……。勝ち方が気持ち良かったからまだしも……。

「いや、そいつの言うとおりがかもしれないぜ。あんたら、強いよ」「でも僕の勝利はマグレじゃないね。信じない、というのなら今度の月一テストで証明してみせるよ」

マグレだと抜かしやがった枕田を睨む。すると、向こうは睨み返してきた。

「じゃあな」

十代がそう言つて、ボートを漕いでここを去る。

ふと女子陣の方をもう一度見てみると、枕田がまだ僕のことを睨みつけていた。

——今度相対した時には、^{ライバル}好敵手になっているんじゃないか？

——なんてらしくない推測を、僕はしてしまった。

To be continued

おまけ

「今回の最強カードは『ボマー・ドラゴン』だ。このカードが攻撃した時、戦闘ダメージはゼロになり、このカードを戦闘で破壊したモンスターを破壊するぞ」

“ボマー”さんの除去おいしいです。いやマジで。」

TURN - 03 水上決闘！？ 楓VSジュンコ（後書き）

一ヶ月ぶりです。どうも、YBFです。

とりあえず、こんな感じの更新間隔になります。

そうでもない、と、失踪扱いになりそうなので。

……執筆時間が欲しいです。

それさえれば、もっと短い間隔で掲載できるはずなので……orz

とりあえず。

誤字または脱字、そしてデュエルにおけるミスなどがあれば、指摘してくださいとありがたいです。
では。

TURN - 04 月一試験！ ウィクトーリア（前書き）

二回連続10日に投稿！ どうも、YBFです。

これなら、TURN - 01もTURN - 02も10日に投稿すればよかったかなあ……。

追記

2011.8.11

ミスがちらほらと指摘されています。未修正のものもあるので、指摘は感想一覧を見て、重複しないようにお願いします。

また、まだまだ未指摘のものもあるかもしれませんので、ミスがあれば指摘よろしくお願いします。

TURN - 04 月一試験！ ウィクトーリア

月一試験。筆記と実技の二種のテストを受け、成績優秀者は上の寮に移る事もできる、重要なイベント。

一回目の月一テストに向け、勉強する事にした。

もちろん、筆記はデュエルの知識だけでなく五教科のテストもある。まあ、どうにかなるだろうが。

とりあえず、筆記試験に関しては三沢大地の独壇場な気がする。

入学試験でも筆記では一番で、アニメでも序盤は活躍していたはず。『ウォータードラゴン』初登場のあたりまで。

……って、何話だっけ。『ウォータードラゴン』の初登場。序盤だったのは覚えてるのだけど……。まあ、いいや。

とにかく。筆記は三沢大地の独壇場。例えばトリップ前に既に学習済みの範囲であるうとも、勝てるとは思えない。そして、実技も力ードの引きにかかっているから、安定しない。

……あれ？ 死亡フラグたってる？ いや、気のせいだろう。うん、そういう事にしよう。

それにしても、ラー・イエローだと原作に介入しようとする結構強引にいかないといけなくなるなあ。

アニメでのイベントに介入して、満足するのが目的だから、その目的さえ果たせるのなら面倒でもがんばるけど、長く続くと考えると少しウツだな……。

まあ、仕方ない。

とりあえず、がんばるしかないだろう。

僕が楽しむために。

五教科のテストは一日目、デュエルの知識および実技試験は二日目、という日程。

一日目、二日目ともにどうにかなった感じがする。と、いうかデュエルの知識は現実世界で遊戯王OCGをやってさえいれば誰でもわかる問題だった。

そして、アニメどおり二日目のテストの最中に十代が教室に入ってきて、テストを受け取り、そしてすぐさま寝た。何のために来たんだよ、と言いたい。

とりあえず。そんなこんなで筆記試験は終了。三沢が十代たちを起こそうと努力しているみたいだし、俺も介入しようかな、と。

「おい、二人とも！ テストはとくに終わったぞ！」

「そうだぞー。つか、ためえら寝すぎだぞー」

三沢が翔を揺らし、僕が十代を揺らす。先に起きて大きなリアクションをとったのは翔だった。

「ひあっ！？ やっちまった……何のために勉強したんだか……」

「気にすんな。実技テストが本番よ」

と、翔の大きなリアクションで起きたのか、十代が急に起きた。

「あれ？ みんなは？」

「もう昼飯か？」

「購買部さ。なんせ、新カードが大量入荷する事になっているからな」

「ああ。そうだな」

「ええ！？ カードの大量入荷！？」

翔は驚き、十代も気になるのか立ち上がった。

そして、なぜかは知らないが、急に三沢が無駄にかっこいいポーズをとった。

……うーむ。なぜだ？

「みんな、午後の実技テストに向けてデッキを補強しようと買いにいったんだよ」

「三沢君と玄咲君は？」

「ぼくは今のデッキを信頼している。新しいカードなんて必要ない」

「僕もだな。それに、カードってのは吟味してデッキに入れるものだからな。あせって新しいカードを購入しても、デッキに採用できるかどうかじゃなきゃ意味がない」

「あ、アニキは？」

「俺は——興味ある！ どんなカードがあるのか見たくてしょうがねえ！ 行こうぜ、翔！」

「うん！」

そう言っ、十代と翔が購買部へと駆けてゆく。わお。すごく速い。びっくりするほど速いぞ。

「なあ、僕らはどうする？ カードは買わないにしても、暇だろ？」

「そうだな。……まあ、昼飯を買いに食堂に行かないか？ 今なら空いていそうだしな」

「おお、ナイスアイデア三沢。じゃあ、行こうぜ」

そんなこんなで、僕らは食堂に行くことにした。

そして、午後二時。迎えた実技試験。

原則として、同じ寮の生徒とのデュエルのはずなのだが……。

「シニョール玄咲は入学試験では筆記実技ともに上位、実技にいたってはワンターンキルと成績優秀。よって、オベリスク・ブルーの生徒——シニョール ^{つえん} 首藤 とデュエルをして、勝てばシニョール玄咲をオベリスク・ブルーに昇格させる、という話になっているノ―ネ！」

と、言われても。

正直、ワンターンキルはただ単に運がよかっただけと言わざるを得ない。つか、あれはできすぎ。

ロマンの詰め合わせデッキでよく手札が揃ったな、としみじみ思う。

……まあ、それはさておき、だ。

目の前にいるのはオベリスク・ブルー。なんだかんだでブルーとの対戦は三度目なんだが、イエローとのデュエルはまだなのだろうか。

「……お前か。クロノス教諭が気に入っているラー・イエローは」
それよりも。この目の前にいるヤツは、今までの対戦相手とは一癖もふた癖も違いそうだ。僕の事を見下してはいるけれども、なんとなく、今までのとは、違う。

見下しているのは、自分の実力に自信を持っている。裏づけがある。そういう事だろう。

——ならば、今までのようにはいかない。

油断はできない。念には念を。慎重に、だが怯まずにデュエルをしなければ——負けるかもしれない。

「確かに、お前は入学試験において、教師をワンターンキルで倒した。だが、それは運に過ぎない。……俺の——デュエル・アカデミア次席の首藤次郎の計算され尽くしたデッキの前に敗北し、差を思

「い知れラー・イエロー……！」

芝居がかったブルー生徒の声。言っている内容も、その言い方も、中二病。まあ、僕もその気があるから人の事はいえないのだけど、……こうやって見ると、痛いな。

……まあ、いい。

「そう思うのは勝手だけどさ、僕を見下すのは、僕を倒してからにした方がいいんじゃない？ 負けたら、恥ずかしいと思うよ？ そういうの」

とりあえず、こういう自信満々な人間を見ると、そうやって挑発したくなる。それが、玄咲楓という人間だ。……自分でも、直した方がいいかな、とは思っただけれど。

でも、こういった場面では役に立つ。

「言っただな……！？ お前こそ、後悔するなよ……！？」

どうやら、相手は挑発に引っかけたようだ。ああいう発言をするようなヤツほど、我慢強くはないのだ。となれば、こういう挑発で集中力を欠く、なんて事はザラだ。

……まあ、どこまで通用してくれるかが相手次第、という時点で、あまり使えないんだけどね。挑発。

とにかく、だ。

今はただ、やるしかない。

「デュエル！」

「デュエル！」

玄咲楓 LP 4000

首藤次郎 LP 4000

「先攻は譲ってやる」

「そりゃどうも。僕のターン、ドロー！」

正直、手札はよろしくない。いや、このデッキ構成にしては、マシな方かもしれない。とりあえず、後攻ワンキルを狙えるような手札じゃないから、先攻で正解だったかもしれない。

とりあえず、定石を打とう。まずはそれからだ。

「僕はモンスターをセツト！ カードを一枚伏せて、ターンエンド！」

「フン。それだけか。せっかく先攻を譲ってやったというのに。…

…まあ、いい。俺のターン、ドロー」

僕の行動がそんなに不満だったのか、鼻を鳴らしながら、静かに相手はドローをする。

そして、引いたカードを見て、口元をニイ、と歪ませる。……どうやら、キーカードを引いたらしい。

——さて、何が来る……！？

「俺は手札より『ウィクトーリア』を守備表示で召喚する」

ウィクトーリア

ATK1800 DEF1500

目の前に現れるは、PSPにてゲスト参戦した某機体——げふんげふん、ではなく——金色の天使。

カードイラストと違って、イラスト下部にあったドラゴンは、姿を現していない。効果を使用していないからいない、という事だろうか。

……いや、それ以前に。

僕のデッキは、基本的には墓地に『真紅眼の黒竜』を落として、それを特殊召喚するという戦術を用いる。

そうする事で、手札には下級モンスター、もしくは魔法・罠カードを来るように調整するのだが、『ウィクトーリア』には【ドラゴ

ン族】に対するメタともいえる効果がある。

——1ターンに1度、相手の墓地にあるドラゴン族モンスターを自分フィールド上に特殊召喚する——

最悪な事に、僕のデッキの現時点での最高打点は『真紅眼の黒竜』の攻撃力2400だ。それ以上の攻撃力を持つモンスターは今、デッキには入っていない。入れていないのだ。

……くそ、迂闊に墓地肥やしもできない。

「墓地肥やしさえしなければ、『ウイクトリア』の効果で特殊召喚されずに済む——そう考えているな？」

「……！？」

「そのくらい、わかっているさ。だが、今は何もしないでおう。カードを2枚伏せて、ターンエンドだ。お前のターンだ」

相手は様子見に入ったようだった。

……怖い。

『ウイクトリア』が場にいる限り、僕は墓地肥やしはそう簡単に出ない。

「僕のターン、ドロー！」

しかも、手札がかなり事故を起こしている。ここまで事故ったのは久しぶりだ。まあ、こんなよくわからないデッキなのだ。事故を起こして当然だが——ここで事故は勘弁だ。

「……このまま、ターンエンドだ」

「そして、俺のターンだ！ ドロー。……フン、これで全てが整った」

ニヤリ、と首藤が口元をゆがめるのが見えた。……何かを、仕掛けてくる……！！

「通常魔法『闇の指名者』を発動。『真紅眼の黒竜』を手札に加え

てもらおうか」

「!？」

予想外だ。まさか、『闇の指名者』などというカードを使ってくるとは。

正直、あまりメリットを感じられないこのカード。まさか、ここからハンデスしてくるのだろうか。

「僕のデッキには確かに『真紅眼の黒竜』がある。手札に加えるぞ」その瞬間、「ブルーがプレイミスだと!？」「オベリスク・ブルーの永遠の二番手、首藤次郎が、ミスなんてありえない!」などという声が聞こえた。

——いや、プレイミスなんかじゃないはずだ。

ハンデスか何かで墓地に落とし、『ウィクトーリア』の効果でコントロールを奪う——そうに違いない。

——でも、僕には防ぐ手段がない。

「ここでリバースカードオープン、罠カード『マインドクラッシュ』! お前の手札から『真紅眼の黒竜』を捨ててもらおうか」

予想通りの展開。でも、それを覆せない……!!

「そして、『ウィクトーリア』の効果を使用する。お前の墓地に存在する『真紅眼の黒竜』を俺の場に特殊召喚する!」

真紅眼の黒竜

ATK2400 DEF2000

頼れるエースモンスター。それが、目の前で、僕と相対して咆哮した。

金色の竜を操る天使、『ウィクトーリア』に頭をなでられ、嬉しそうにしている『真紅眼の黒竜』。

……くそ、まさかこういう展開があるだなんて……！

「バトル。『真紅眼の黒竜』でセットモンスターに攻撃」

「……セットモンスターは『仮面竜』だ」

仮面竜

ATK1400 DEF1100

「効果により、デッキから二枚目の『仮面竜』を特殊召喚する……！」

「……リクルーターか。面倒だな。コントロールを奪っても、効果で特殊召喚できるのは持ち主であるお前だからな。……ほんと、面倒だ。……ターンエンドだ」

「僕のターン……ドロー！」

駄目だ。まだ手札がよくなならない。このままじゃ、状況を打開できない……！

相手のフィールドには墓地のドラゴン族モンスターを1ターンに1度特殊召喚できる『ウィクトーリア』。

そして、僕のデッキのエースモンスター『真紅眼の黒竜』。

この状態で、もう1体の『ウィクトーリア』が現れてしまった場合、状況はさらに悪化するだろう。

「……このまま、ターンエンドだ……！」

何もできない。このままじゃ、勝てない……！

「ふん、何も策がないか。……ならば、そのまま負ければいいさ。

俺のターン、ドロー。……『真紅眼の黒竜』で『仮面竜』に攻撃」

追加のモンスターはなし。手札事故でも起こしたのだろうか。そうであるありがたいが。

とりあえず、『真紅眼の黒竜』の攻撃により『仮面竜』は破壊されるが効果によりデッキから更なる『仮面竜』が姿を現す。

「面倒だな……ターンエンド」

「僕のターン、ドロー！……ターンエンド」

「何も引けなかったか。所詮はイエロー。デッキ構築もできんか」

「デッキ構築自体はできてる。ただ、引き運に関してはまだまだ二流なんでね」

「ならば、二流らしいデッキにすればいいものを。俺のターン、ドロー。そして、『強欲な壺』を発動し、さらに二枚をドローする――」ここで、首藤の動きが一瞬止まった。……何か一瞬迷っているようだ。

「――ここは攻めさせて貰おうか。俺は『真紅眼の黒竜』を生贄に、『光神テテウス』を召喚する！」

目の前から『真紅眼の黒竜』が姿を消し、代わりに現れるは純白の天使。大きな羽も特徴的。頭の上に輪が浮遊していればパーフェクト、という感じである。――が、今は関係ない。

光神テテウス

ATK2400 DEF1800

上級モンスター。攻撃力は2400と『真紅眼の黒竜』と然程変わらない。

……だが、それよりも――

「だけど、それじゃけじゃない。『ウィクトーリア』の効果はまだ残っている――！」

「そうだ。『ウィクトーリア』の効果を発動。再び『真紅眼の黒竜』を特殊召喚する」

再び目の前に現れ、立ちはだかる『真紅眼の黒竜』。

状況は悪い。こうなってしまうと、次のドローカードが本当に重要になってくる……！

「バトルだ。『光神テテウス』で『仮面竜』に攻撃！ “ホーリー・サルヴェイション”！」

攻撃力2400のモンスターの前では、守備力1100など無力。

『仮面竜』はその姿を消す。

「く、効果で『ボマー・ドラゴン』を守備表示で特殊召喚する！」

ボマー・ドラゴン

ATK1000 DEF0

このカードを戦闘によって破壊したモンスターを道連れにする『ボマー・ドラゴン』。伏せカードは残念ながらブラフであるため、壁を出さなければ攻撃力2400と1800の攻撃で敗北が確定してしまう。

『ボマー・ドラゴン』を利用してしまふ可能性が出てくるが、そうしなければ——負ける。

「……ふん。『真紅眼の黒竜』で『ボマー・ドラゴン』に攻撃し、『ウィクトーリア』でダイレクトアタック！」

「『真紅眼の黒竜』は『ボマー・ドラゴン』の効果で破壊できる。

……だから、『真紅眼の黒竜』で攻撃なんだろうが」

「ラー・イエローでもその程度はわかるか。……このまま、ターンエンドだ」

玄咲楓 LP2200

状況は芳しくない。このドローが全てを握っている。

「僕のターン、ドロー！——！？僕は『天使の施し』を発動！三枚ドローし、二枚を捨てる！」

「ここで手札増強か。悪運の持ち主だな」

「悪運でも何でも結構！さらに、『強欲な壺』を発動し、二枚ドロー！さらに、『闇の誘惑』を発動し、二枚ドロー。そして、『ダーク・ヴァルキリア』を手札から除外する！」

ここに来ての連続ドロー。

チートドローといわれても仕方がない。

でも、これのおかげで、打開策は見えてきた。

このターンで決める事が出来なければ、向こうは総攻撃を仕掛けて、そのまま勝利をおさめるだろう。

つまり、実質、僕に残されたターンはこのターンのみ。

でも——もう、僕には勝利への道は見えている。

「——このターンで決めさせてもらう！」

「何！？」

「装備魔法『D・D・R』を発動！ 手札を一枚捨て、除外している『ダーク・ヴァルキリア』を蘇生する！」

ダーク・ヴァルキリア

ATK1800 DEF1050

漆黒の天使が目の前に現れる。純白の天使とは正反対のその姿。

攻撃力は劣るが——効果は攻撃的だ。

「そして、『ダーク・ヴァルキリア』を再度召喚し、効果を使用する！ 魔力カウンターを載せ、それを取り除き、『真紅眼の黒竜』を破壊する！」

自分のモンスターではあるが、仕方がない。……なんとなく申し訳ない気持ちになるが、破壊される寸前、『真紅眼の黒竜』がうなずいているように見えた。

……なんだろう。目でも疲れているのだろうか。いや、今はそれよりもデュエルだ。

「そして、手札より魔法カード『思い出のブランコ』を発動！
『真紅眼の黒竜』を特殊召喚する！」

真紅眼の黒竜

ATK2400 DEF2000

「……取り戻した、か。だが、攻撃力は2400——『光神テテュ

ス』と相打ちだぞ?」

「いいや。まだまだ。二枚目の『思い出のブランコ』を発動し、『ヘルカイザー・ドラゴン』を特殊召喚する!」

「何!?!」

ヘルカイザー・ドラゴン

ATK2400 DEF1500

「だ、だが攻撃力は2400だ! 結局、このターンで俺に与えられるダメージの最大力は1800! このターンじゃ決められないぞ! (——それに、俺の手札には『ライトヒトグ・ボルテックス』と二枚目の『ウィクトーリア』がある。これで勝利は——)」

「そして、リバーカードオープン、装備魔法『スーペル・ヴィス』! 『ヘルカイザー・ドラゴン』に装備する!」

初期の手札には罠カードが一枚もなかった。だが、カードを一枚も伏せないのはどうしても怖い。だから、伏せていた『スーペル・ヴィス』。さっきの連続ドローでなんとか使えるところまで持ったこれだ……!

「——そして、再度召喚された『ヘルカイザー・ドラゴン』の効果。 “このカードは、1度のバトルフェイズ中に2度攻撃する事ができる”——!」

「な、何!?!——と、言う事は?!」

「攻撃力2400の『ヘルカイザー・ドラゴン』の二回攻撃でモンスターを一掃、そして、『真紅眼の黒竜』(攻撃力2400)と『ダーク・ヴァルキリア』(攻撃力1800)のダイレクトアタックで、終わりだ」

「な、な……!?!」

「まずは『ヘルカイザー・ドラゴン』の一回目の攻撃だ。『ウィクトーリア』に攻撃! “ヘルカイザー・バースト・ファースト”オ!

金色の天使が、竜の口から放たれる炎に焼き尽くされる。まずは、一体目。

「そして、二回目の攻撃！ 『光神テテウス』に攻撃！ “ヘルカイザー・バースト・セカンド”オ！」

「ち、“ホーリー・サルヴェイション”！」

純白の天使は炎に焼き尽くされながらも、竜の懷まで迫り、その身体を輝かせた。その光に『ヘルカイザー・ドラゴン』は飲み込まれ、消えてゆく。

すまない、『ヘルカイザー・ドラゴン』——と思いつつも、僕の思考は目の前の状況へと向けられる。

——これで、相手のフィールドはがら空きだ。

「……まあ、これはほとんど蛇足だが、『スーペル・ヴィス』が墓地に送られたから、『ヘルカイザー・ドラゴン』を墓地から特殊召喚するぞ」

そして、再び現れる『ヘルカイザー・ドラゴン』。気のせいか、咆哮が前よりも弱々しかった。

「さて、と。……止めた。『ダーク・ヴァルキリア』と『真紅眼の黒竜』——ついでに、先ほど特殊召喚したばかりの『ヘルカイザー・ドラゴン』でダイレクトアタック！」

漆黒の天使と黒竜、そして地獄を統べる帝王が同時に攻撃を放つ。純白の奔流と、漆黒の炎弾、そして炎の奔流。

「ぐあああつ！」

そして、相手——首藤の叫び声。……男の叫び声とか、正直興味ないが。まあ、聞こえてきたので列举しておく。……いや、やつば忘れよう。

首藤次郎 L P O (2 6 0 0 のオーバーキル)

「そ、そんな……この俺が……、オベリスク・ブルーの俺が……ラー・イエローに負けた……だと……!？」

「オベリスク・ブルーなら強い、ってわけじゃない。強いほうが勝つ。つまり、そういう事なんだよ」

僕が静かにそう言い放つと、歓声が沸きあがった。……え？ なにに？

……まさか、ラー・イエローである僕がオベリスク・ブルーに勝ったからだろうか。

「かつこいいぞ玄咲ー!」

「『真紅眼の黒竜』やっぱりカツコイイ!」

「『ヘルカイザー・ドラゴン』もカツコイイぞ! 攻撃力2400の二回攻撃? マジパネエっす!」

なんか、すごく盛り上がってる……。

そして、その後。

「——万丈目! これでお互いライフは1000ポイントずつ、でもここで俺が攻撃力1000以上のモンスターを引いたら面白いよなあ?」

「何を戯言を! そう簡単に——」

「でも、引いたら面白いよなあ! 俺のターン、ドロー! 俺はこのカード、『E・HERO フェザーマン』を召喚しプレイヤーにダイレクトアタック!」

結局、十代vs万丈目もアニメどおりの結果に終わったらしい。

「——やったあ! やったぜアニキー!」

隣にいる翔が騒いでいる。うーん。まあ、気持ちわかるけどさ。それにしても、あの引きは凄いな。なあ、三沢

「そうだな。あれだけは計算でどうこうというレベルではなさそうだ」

「三沢君、玄咲君! アニキのところに行こうよ!」

「……そうだな。十代を祝福してやろうか」

「よし、そうと決まれば行くか、翔、三沢！」

そうして、僕らは十代の元へと向かった。

「おい、おいアニキー！」

デュエルフィールドに降り、翔は走って十代の傍へと向かい、僕と三沢はその後から十代の傍に向かう。

<見せて貰いましたよ遊城十代>

すると、校長の放送が入った。

<君のデッキへの信頼感、モンスターとの熱い友情。そして何よりも、勝負を捨てないデュエル魂、それはここにいる全ての者が認める事でしょう。よって、勝者・遊城君。ラー・イエローに昇格です>
校長のその言葉を合図にして、「おめでとー！」や「やったぜ十代ー！」などといった十代を称えるコールが再び会場中に響き渡った。

<そして、玄咲楓>

はい？ まだ何かあるの？ いや……まさか……。

<遊城君に勝るとも劣らぬデッキへの信頼、カードの効果を最大限に活かす卓越したタクティクス、そして劣勢でも冷静かつ熱いプレイングするデュエル魂。そのどれもが非常にハイレベルなものだという事は、やはり、ここにいる全ての者が認める事でしょう。よって、玄咲楓君。君はオベリスク・ブルーに昇格です>

その直後、「玄咲君おめでとー！」「さすが楓！」などと歓声が沸きあがる。……つたく、こういうのは僕のガラじゃないというのに。

「やったな、玄咲。先を越されてしまったな」

そう言ったのは、三沢だった。……筆記試験主席を差し置いてのブルー昇格。三沢からしたら、悔しいことなのかもしれない。それでも、三沢は僕を称えてくれた。

「うん。けど、ま。三沢だったらすぐブルーに昇格できるだろ？」

「ああ。それくらいの実力は持っているつもりだ」

自信満々の三沢。……うん。がんばってくれ。ついでに空気にな

らないように努力する必要があるかもしれないが。

……で、その夜。

僕は三沢の部屋にお邪魔していた。

「引越しの準備はしなくていいのか？」

「ああ。結局僕はイエローに残ろうかと思ってね。あの後、今回のデュエルを自主的にレポートにまとめたんだけど、結構、マグレだつてわかつてさ……」

振り返ると、あれはどう考えても引きがよかったから勝てた、という感じである。

『天使の施し』で『強欲の壺』。『強欲な壺』で『闇の誘惑』を引く。などなど。運任せな部分が多かったし。『ヘルカイザー・ドラゴン』も『天使の施し』の時だ。……あれは手が震えた。

「反省の意味も込めて、昇格は自粛したんだよ。あれは運がよすぎだ。序盤の手札事故を含めても」

「いいのか？ 折角ブルー寮に行けたんだぞ？」

「いや。ちよつと考えることがあつてさ」

「なんだ？」

三沢が聞いてくる。うん。思いついたことを言ってみる。

「……下克上、してみないか？」

「下克上、だと？」

「ああ。今の制度だとオベリスク・ブルーが一番上だろ？ でもさ。ラー・イエローでもオベリスク・ブルーに勝てるのだから、これからラー・イエローが何度もオベリスク・ブルーに勝てば、ラー・イエローこそが一番上の寮になったりしないか？」

そう。

オベリスク・ブルーだから強い、というプライドの持ち主の中に入るよりか、そういった野心を持って努力したい、というのが僕の願望だ。

「なるほど、それは面白いな」

「だろ？」

そんなこんなの話しながら、夜は更けてゆく。

T o b e c o n t i n u e d

おまけ

「今回の最強カードは『ヘルカイザー・ドラゴン』だ。再召喚したこのカードは、一度のバトルフェイズに二度攻撃する事ができるぞ！」

「まあ、コイツもロマンの一種だろうか。うん、でもいいよね。二回攻撃ってかっこいいよね。まあ、それだけだけど」

TURN - 04 月一試験！ ウィクトーリア（後書き）

何気に難産だった今回の話。

初期案では、TURN - 02で戦った取り巻きとの再戦のつもりでした。

――が、当時読んでいた某作品とあまりにも似ていた事に、前話の時にやっと気づきました。

で、先月急いで書き直した結果がこれです。

一応、ミスがないようにしているつもりですが…… ちょっと、今回は不安です。

とりあえず、今回登場した首藤次郎は今後も脇役としてちょいちょい使っていこうかな、と勝手に思っていたり。

…… まあ、メインキャラクターになる事はないと思います。多分。

とりあえず。

誤字または脱字、そしてデュエルにおけるミスなどがあれば、指摘してくださいとありがたいです。

追記

2011.8.10

効果の勘違いによるミス。『ダスト・シュート』を『マインド・クラッシュ』に変更。

何をやっているんだ、自分は。

2011・8・11

カードの種類のミス。『闇の指名者』が通常魔法だったため、一部デュエルシーンを書き換えました。

……再びの大きなミス。……凹みますね。

2011・8・14

『闇の指名者』、『マインドクラッシュ』の発動タイミング、『スーパール・ヴィス』の効果が発動していなかった部分を修正。

……修正作業って、結構精神ダメージがでかいものですね。

TURN - 05 野球対決！？ 超熱血球児（前書き）

前半はほとんどデュエルしません。 ってか、遊戯王である必要すらないです。

おい、デュエルしろよ。

そんな感じの、TURN - 05をどうぞ。

TURN - 05 野球対決!? 超熱血球児

月一試験も終わり、十代たちの退学騒ぎも終わった頃。

体育の授業は球技——野球となっていた。

デュエル・アカデミアはデュエルの専門学校といってもいいのだが、高校である事にかわりはない。五教科もあれば、体育もある。つまりはそういう事。

と、いうか。個人的には十代vsタイタンくらいは見たかった気がする。と、いうかそこを逃すと、迷宮兄弟戦も逃すわけだから、原作介入のチャンスが減る、というわけだ。

楽しければ全てよし、と考えている以上、そこには介入したかったのだが、何日に十代たちが行動するかを把握できてなかったのがいけなかった。……うーん。残念。

閑話休題。

とにかく、今、僕は野球をやっている。結構本気で。

なぜかという、体育での成績も今後に大きく関わってくるからだ。

デュエル・アカデミアではデュエルが全て、と言ってもいいくらいなのだが、そのデュエルにおいて一番大事なデッキの強化は、購買部でのカード購入である。

そこでは、普通に金での支払いもあるのだが、もう一つ、DPデュエルポイントによる購入もある。

DPは月一テストなどでの成績によって各生徒に与えられる。金欠の生徒たち、あるいはよりデッキを強化したいと思っている人たちがDPを使ってデッキを強化する、というのが一般的だ。

普段ならば月一テストでしか得られないDPだが、実はこの野球対決、優勝チーム全員にDPを与えられるという、とんでもないものだった。

——なら、やるしかないだろ！

そう言ったのは誰だったか。月一テストで失敗し、意気消沈していたヤツらが急に蘇った。

普段は体育にやる気を見せないヤツらまでテンションが上がっている始末。

……なるほど、デュエルが全ての学校、というよりデュエル至上主義者の多いこの世界においては、カードで釣る、というのは効果的な手段らしい。

話は試合に戻る。

イエロー寮vsレッド寮の開幕戦。

9回表。バッターボックスに立つのは4番ピッチャーの十代。ここまで、十代一人にイエロー寮はやられてきた、と言っていい。

130km/hはあるだろうストレートでイエローの生徒をギリギリ舞いに行っている。8回裏までで20奪三振。なんというドクタイクだろうか。

そして、打たれたヒットも僅か2本。四死球なし。デュエルやめて野球の道に進めよ、と思ったりもする。

しかも、だ。ここまで2打数1安打1本塁打3打点。一打席目はアウトだったものの、強烈なショートライナーだった。どんな強打者だよ、おい。

ちなみに。自分はここまで3打数1安打2盗塁。甘く入った失投を逃さずミートしてセンター前ヒット。そこから二塁へ盗塁し、キヤッチャーである翔の弱肩を利用して三盗も決めた。

——が、それが得点につながらないのがイエロークオリティ。というか十代クオリティ。

数名の野球経験者と現野球部など、そこそこ運動神経のいい生徒の集まっているイエローであるが、それと比べてもズバ抜けているのが十代、という事だ。そもそもあのストレートは異常だ。

イエローで一番バッティングが得意でこの試合4番ピッチャーで

先発予定だった三沢がなぜ遅刻している（アニメだと、デッキ構築して遅刻、だったはず）ため、余計に敗戦ムードが漂っている。セカンドの守備位置でバッターボックスにいる十代に視線を向ける。

……とにかく、この場面は絶望的だ。

そんな強打者を前に、走者がいる。確実に点を取られる。ここでの失点は負けに直結すると言ってもいい。

万事休す。そう思ったときだった。

「待てー！ その試合待ったー！」

どうやら、我がチームの4番ピッチャーがようやく現れたようだ。

TURN - 05

野球対決！？ 超熱血球児

結果として、イエロー寮はレッド寮に勝利した。

三沢の剛速球が十代をねじ伏せ、三沢との直接対決を望んだ十代

が二死満塁の逆転サヨナラの場面を作り出し、三沢が逃さず逆転サヨナラ満塁ホームランを放つ、という結果で。

と、いうか。三沢も十分におかしいヤツだ。130km/h近いストレートを投げるとか一般人には無理だというのに。野球部にも入って甲子園を目指した方がいい気がする。コイツ。

そんな事を、練習の時に言ってみたら、「俺は野球よりもデュエル理論の方が大事だから」という返事が返って来た。全国の高校球児に謝るべきだと思う。特に投手に。

必死に練習しても最高球速が130km/hに届かないヤツだっているんだぞ。……そう簡単に130km/hをポンポンと投げるとか……ホント、謝れよ。マジで。

まあ、自分も人の事が言えなかつたりする。

いや、別に剛速球が投げれるとか魔球があるとかじゃないけれど……まあ、こつちの世界に来る前、帰宅部で集まって野球の練習をしまくってた時期があつたしなあ……。懐かしいなあ……。で、その名残で一応、野球部でもおかしくないくらいの実力は持っているつもりである。

……現実味がない？ ……じゃあ、ギャグ補正でいいや。

そして迎えたイエロー寮の第二戦。

イエロー寮vsブルー寮というカード。イエロー寮の先発投手は僕である。

てつきり、先発のローテーションは三沢、野球部、野球部、三沢だと思っていたのだが、イエロー寮には投手経験のある野球部がおらず、なぜかは知らないが自分の方が適正があつたらしい。

……なんだろう。ご都合主義だろうか。そうなんだろうか。……まあ、いいや。楽しめるなら。

ちなみに、キャッチャーは三沢。……それにしても、何でも出来るやつだな、三沢。どうして空気になっちゃったんだろう。……

いや、それは気にしてはいけない問題か？

とりあえず、サインを確認してみる。なんというか……細かい。コース指定とか初心者には無理な話なんだが。……まあ、狙える限りで狙ってはみるが。

そんな感じで、試合は始まった。

9回裏。1対1。同点。

ブルー寮の攻撃、二死満塁。

マウンドは未だに僕。なんか満塁のピンチではあるけれど、そのどれもがエラーによるものである。つか、野球部仕事してくれ。頼むから。

バッテリーボックスにはブルー寮の4番ファースト。自称デュエルアカデミア野球部が誇る一年生スラッガー兼エース、長門大和。ここまで僕から二安打を放っている強打者。と、というか他が全然打ってない。

唯一違うといえば、この前の月一テストでの相手、首藤だろうか。アイツはなかなかやるヤツだった。

とはいえ、ブルー寮の戦力は本来よりも低下している。

何故かという、万丈目の離脱だ。数日前に行われた三沢と万丈目のデュエルにより、万丈目が退学、ブルー寮から去ってしまったからだ。

万丈目はブルー寮の4番エースといえる人材であり、身体能力は十代レベル、とはいかないまでも三沢レベルはあつたはずだ。……つまり、大黒柱をブルー寮は失っている。

もしも万丈目がブルー寮に残っていたのなら、同点ではなくビハインドだっただろ――

「来おおおい！ そのピッチャあああああ！ そのボールを策越えしてやるぞおおおい！」

――と、心の声は一人の叫び声によってかき消された。

その主はバッテリーボックスの長門大和。なんか、凄く熱い。どう

いう事なのだろう。出る作品が間違っている気がする。ミ・フルあたりにでも出た方がいい気がする。そのキャラ。

とりあえず、サインを確認する。

打たれる可能性を考えれば敬遠をしたいが、満塁だから無理。サヨナラ押し出しとかやつちゃ駄目だ。

つまり、抑えるしかないわけだ。

僕の持ち球はフォーシームファスト、ツーシームファスト、スライダー、そしてナックルカーブだ。

だが、スライダーもナックルカーブも制球力には自信がない。変化量はそこそのつもりだが、要求されたコースに投げられるほどの器用さはない。

そして、フォーシームもツーシームも球威があるわけじゃない。速いわけでもない。

三沢のリードを信じて投げるしか、僕には出来る事がない。

そして、三沢が出したサインを確認する。そして、テイクバックから右サイドハンドで球を放つ――！

球はインコースに向かう。ここまでのバッティングはそのテンションの高さからは想像できないほど消極的な長門。ストライクゾーンのこの球を見逃す。

二球目。妥当なサイン。よって頷き、投球モーションに入る。

アウトコースいっぱいToStrート。ボール球でもいいというサインだったが、ストライクゾーンギリギリに入ったようだった。というか今日のストライクゾーンは広めだ。

流星の自称デュエルアカデミア野球部が誇る一年生スラッガーもこれには納得がいかなかったのか、首をかしげている――が、目つきがここで変わった。

ただの熱いやツかと思ったら、そうではないらしい。

……と、なるともうストライクゾーンギリギリは通用しないと見ていいだろう。

そう思ったのか、三沢もサインをまだ出していない。悩んでいる

ようだ。いくら相手の弱点をつくりードが持ち味の三沢であろうとも、このスラッガーの弱点を見つけることはできないらしい。

悩んだ末に三沢がタイムをとり、こちらに駆け寄ってきた。

「どうする、楓？ …… 安全策はないぞ。何か隠し球とかないか？
俺の手札はつきているんだ」

三沢の前に提示した僕の球種は、フォーシームファスト、ツーシームファスト、そして変化球のスライダーだ。ただし、スライダーはフォーシームとツーシームと比べると制球が甘い。

この手札を持ってしても、目の前のスラッガーに太刀打ちできない。

「投手交代で俺、という選択肢もあるが——それも厳しいだろうな。データじゃアイツはストリートにはめっぽう強い。それでいながら、変化球にも対応できる柔軟さもある…… 最強のバッターだ」

恐らく、純粋なバッティングスキルなら十代よりもあるのは確かだ。アッパースイングで豪快に打球を飛ばす十代とは違い、教科書どおりのレベルスイングでボールにバックスピンをかけ、長打を生み出す長門。

どちらが怖いかといえば、長門に決まっている。レベルスイングを極めたバッターというのは、何より崩れない。安定したバッティングをするのだ。…… 勝機が薄い。

それに勝つにはどうすればいいか。

「…… 博打しかないだろ。三沢。計算派の三沢には屈辱かもしれないけど、ここは運に全てを任せよう。実猛一球種投げれる。でも、スライダーよりも制球が酷いし、しっかりと投げれる確立は凄く低い」

「なんだ？ 言ってみてくれ」

「——」

「…… なるほど。それはいいかもしれない。最後の最後なんだ。やってみよう」

そして、三沢はホームベースへと戻り、ミットを構えなおす。

「ミーティングは終了か、ピッチャー？」

「……ああ、終わりだよ」

「来い」

「……言われなくても……！」

三沢に言った球種を投げるためには、今まで以上に集中する必要がある。成功確立は恐らく10%未満。そして、投げれたとしても打たれない保障はない。だが、他の球種よりはマシのはずだ。

投球モーションに入る。

Cアーチを掲げながら、腰の回転に肘の回転を連動させ、ボールを指で転がしながらリリースする——！

今までとは少し違う投球モーション。……だが、これこそが切り札。^{ジョーカー}

ボールはフォーシームともツーシームとも、スライダーとも違う軌道を描く。

少し山なりに、だが、スピードはフォーシームと然程変わらない。そんなボールに、長門は食いついた。山なりなフォーシーム。つまり、それは棒球だ。手元でノビず、おじぎをするボールを打つことなど、長門には容易である。

故に、この試合で一番のスイングをここで見せる。スイングの始動する瞬間ですら、風を切り裂く音が聞えてきそうなほどだ。

——だが、残念だ。それは棒球じゃない。

成功したかどうか、この時点ではまだわからない。——だけど、なんとなく確信していた。切り札を切ることに成功し、勝利した、という——

長門は棒球と予測しスイングをしている。——だが、それがもしも棒球でなかったとすれば？

ボールは長門の予測よりもおじぎをしない。いや、実際にはおじぎをしている。だが、バッターからはそうは見えない。それこそが、この切り札だ。

「まさか、こんな場面で投げれるなんて思わなかったよ。成功率10パーセントにも満たない魔球をさ」

魔球。そう、魔球だ。……いや、実際にはそうではないのだけだ。

フォーシームジャイロ、というものをご存知だろうか。

通常のストレート、フォーシームファストとは違い、バックスピンはなく銃弾のように回転軸がホームベースを向く、極めて特殊な球種である。

バックスピンは違い回転軸がホームベースを向いたこの球は空気抵抗が少ない。よって、手元で減速しない。

フォーシームとは違いバックスピンではないため、重力には逆らえないものの、減速しない事によって本来よりも落下しない——つまり、バッターの予測よりも落下しない、というわけだ。

故に投球モーションは通常とは変えざるを得ない。さらに、リリースの瞬間は他の球種と比べても極めて特殊であり、コツを掴む事さえ難しい。

だけど、僕には投げる事ができる。成功率こそ低いし、改善される気配はない。だが、これで十分だ。

——目の前では、長門のバットが空を切り、ボールはミットに収まっていた。

「なんか、熱い場面だったから忘れてたけど、引き分けの場合はどうするんですか、先生？」

試合終了後。延長戦はなし、と言われていたものの、引き分け時については聞いてなかった。それに真っ先に気づいた三沢が体育の先生に聞いた。

「……ここはデュエルアカデミアだ。……あとはわかるな？ 各チームの先発投手を代表としたデュエルをし、勝った方がこの試合の勝者とする！」

な、なんだってー！？ なるほど。これがデュエル至上主義か。

……なんでもありだな、おい。

「と、言うことは俺とお前だな！ えーと確か、玄咲楓——だったな？」

「ああ、そうだよ」

「噂は聞いている。そこそこやるようだな。だが、こっちはオベリスク・ブルーだ。ブルーだから強いとは言わんが、それなりに実績を積んでいるつもりだ。勝たすつもりは毛頭ない。どちらが強いかデュエルで決めよう！」

「……なるほど。他とは違うな。オーケー。でも、勝つのは僕だからな！」

そして、デュエルディスクが互いに渡される。デッキもロッカーから持ち出し、セットする。

「デュエル！」

「デュエル！」

玄咲楓 LP4000

長門大和 LP4000

「先攻後攻は野球の試合の逆——つまりブルー寮の長門から始める！」

体育の教師がそう言うのと、目の前の男、長門は口元をニヤリとして、右手の指をデッキへと向ける。

「それじゃ、まず、俺のターン！ ドロオオオオオオ！」

大音量のドロ宣言。別に大声を出してもそうでなくても引くカードは変わらない。だが、目の前のこの男は声を出せば出すほどいい引きをしそうだ——そんな感じがする、ドロ宣言だった。

「フツ！ 引いたぜええええっ！ 俺のキーカードをなあああああああっ！……！」

「……叫ぶのはいいから、進行してくれ。長引くだろ」

「おつとそうだった。それじゃ、俺は手札より『UFOタートル』を攻撃表示で召喚！」

UFOタートル

ATK1400 DEF1200

現れるのはまるでUFOのような甲羅——のようなナニカ——を背負う亀^{タートル}。

炎族のリクルーター。リクルートの範囲が広く、レベル1〜4までのチューナーを始めてリクルート可能にした初のリクルーターらしい。まあ、この世界にはまだシンクロはないから関係はないけど、とにかく、これが目の前にいるという事は、相手は炎属性をメインとしたデッキなのだろう。

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」

「僕のターン、ドロー！」

引きはそこそこ。可もなく不可もなく、といったところか。

欲を言えば——折角だから、こういう場面でワンターンキルとかしてみたかったが……まあ、仕方ないか。

「『ダーク・ヴァルキリア』を攻撃表示で召喚！」

ダーク・ヴァルキリア

ATK1800 DEF1050

とりあえず、初手は最近引く確率の高い『ダーク・ヴァルキリア』だ。ほとんどのデュエルでこのカードを引いている気がする。まあ、何度もやっていたら、そんな時期もあるか。

「バトル！ 『ダーク・ヴァルキリア』で『UFOタートル』を攻撃！」

攻撃力の差、400ポイント。白い奔流があっという間に『UFOタートル』を包み込み、粉碎する。

長門大和 LP 3600

ひとまず、先制には成功した、といったところか。だが、わずか400ポイント。かすり傷に等しい。

「『UFOタートル』の効果！ 戦闘で破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の炎属性モンスターを特殊召喚する！ 俺は二枚目の『UFOタートル』を攻撃表示で召喚するぜ！」

そして、現れる二体目の『UFOタートル』。噂によると空を飛べるらしいのだが、地に足がきちんとついている。デマ情報だったのだろうか。まあ、どうでもいいけれど。

「僕はカードを二枚伏せて、ターンエンド！」

とりあえず、次のターンに備え、カードを伏せておく。

「俺のターン、ドロー！ ……ま。実はもう既に準備は整っていたりするんだぜえっ！」

「……何……？」

「俺は手札から『天使の施し』を発動、カードを3枚ドローして、2枚捨てるぜ！ そして、手札から『死者蘇生』を発動！ 『超熱血球児』を攻撃表示で特殊召喚するぜえええっ！！！！！」

なんとという大音量。なんとという騒音。そんな宣言で、目の前に現れるのは、バットを持った少年。

超熱血球児

ATK 500 DEF 1000

ATK 500 ↓ ATK 1500

フィールドに存在する炎属性モンスターの数×1000ポイント
攻撃力が上昇する下級ながら火力のあるモンスター。だが、この
カードを除くと『UFOタートル』しか炎属性はいないため、攻撃力

は1500だ。

何をするつもりだ？ と、思ったその時、長門が手札からもう一枚のカードをディスクにセットした。

「そしてえっ！ 手札より速攻魔法『地獄の暴走召喚』を発動するうっ！！！」

——その瞬間。背筋が冷えた。

「相手フィールド上に表側表示のモンスターがいて、攻撃力1500以下のモンスターの特殊召喚に成功した時に発動できる速攻魔法！ 俺は召喚したモンスターと同名モンスターを手札、デッキ、墓地から全て攻撃表示でとく召喚し、相手は存在するモンスターを選択し、これも全て特殊召喚するカードだぜえええっ！」

今、長門が召喚したのは『超熱血球児』、と、言うことは――

「俺は『超熱血球児』を特殊召喚するぜえええええっ！」

「……僕は『ダーク・ヴァルキリア』を1体、守備表示で特殊召喚する」

「その様子だと、気づいたみたいじゃねえか！ いいねえ！ 最高だよ！」

「どうも。こっちからすりゃ、最悪の状況なんだけど」

「そりゃそうさ！ これは俺の作戦なんだからな！ 『超熱血球児』の効果！ 自身以外の炎属性モンスターの数×1000ポイント攻撃力を上げる！ 合計3000ポイント攻撃力が上がるぜえええええっ！！」

超熱血球児

ATK500 ↓ ATK3500

と、というか冷静に考えて、『ブルーアイズ・ホワイトドラゴン』よりも攻撃力の高い球児って凄い気がする。流石コ・ミの野球人。パワフルだなあ……。って、現実逃避している場合ではない。

「バトル！ 『超熱血球児』で『ダーク・ヴァルキリア』に攻撃いいい！ “ソニックスイング” ううっ！」

あ、あれは！？ パワ・ロフのサクセスモード（広島）にて人間を柵越える事のできる超音速スイング、“ソニックスイング”だとおお！？

……なんて叫んだりはしないけど、どうしてもツツコみたい。うん、もろパ●プロじゃねえか。

目の前で『ダーク・ヴァルキリア』がスイングをくらって吹き飛んだ。よかった。コメディな方で。リアルスイングだったら、どこぞのウツ●イだもんな。K●OLになっちまうもんな。

……あれ？ 伏字が多い気がする。

って、『ダーク・ヴァルキリア』さん。なんでこっち睨んでんですか。なんか怖いんですけど。……あ、消えた。……背筋が冷えたんだけど……。

……いや、そんな場合ではない。

攻撃力3500の攻撃を攻撃力1800の『ダーク・ヴァルキリア』で受けた——つまり、1700ポイントのダメージ。結構痛手だ。

玄咲楓 LP2300

「続いてえええ！ 『UFOタートル』で守備表示の『ダーク・ヴァルキリア』を粉碎するううっ！」

『UFOタートル』が『ダーク・ヴァルキリア』に向かって突進し、『ダーク・ヴァルキリア』が粉碎される。

……よかった。こっちは怖くなかった。って、よくない！ 伏せカードを除けば場は空なんだよ！

「そしてええっ！ とどめだあ！！ 『超熱血球児』二体でダイレクトアタック！ “ソニックスイング” ううっ！」

……このままだと敗北だ。でも、こっちは伏せカードがある！

「っ！ リバースカードオープン！ 罠カード『ガード・ブロック』を二枚発動！ 戦闘ダメージをゼロにし、カードを一枚——二枚発動したから、二枚ドロースる！」

「……防いだか。やるじゃねえかあつ！」

「それほども」

「だが、勝つのは俺だ！ このままターンエンドだぜえええつ！ 相手フィールドには攻撃力3500の『超熱血球児』が3体と『UFOタートル』。

自分のフィールドはがら空き。勝機は薄い。

——でも、やってみようじゃないか。逆転劇というものを——！

「僕のターン、ドロ——！」

引いたカードは、と、——！ これなら、行ける——！

「……なあ、長門」

「何だ？」

「僕の勝ちだ」

「——いいぜ。できるものなら、やってみやがれってんだああつ！」

手札にはキーカードが揃っている。あとはやれるだけやるだけだ！

「僕は手札より『天使の施し』を発動し、3枚ドロして2枚を捨てる。そして、手札より魔法カード『思ひ出のブランコ』を発動！

墓地より『ダーク・ヴァルキリア』を特殊召喚する！」

再び現れる『ダーク・ヴァルキリア』。何気に出番が多い気がする。

「さらに、装備魔法『スーペル・ヴィス』を発動し、『ダーク・ヴァルキリア』に装備。再召喚された状態となった『ダーク・ヴァルキリア』の効果！ 魔力カウンターを一つのせ、それを取り除く事で相手モンスター1体を破壊する！ 『UFOタートル』を破壊！」

超熱血球児

ATK3500 ↓ ATK2500

とりあえず、1体。リクルーターは戦闘破壊するとリクルートされてしまうから、効果で破壊するに限る。

さらに、炎属性のモンスターが減った事で『超熱血球児』の攻撃力は減少する。

「まだまだ続くぞ！ 手札より速攻魔法『サイクロン』発動！ 『スーペル・ヴィス』を破壊し、墓地に送られた『スーペル・ヴィス』の効果で墓地より『真紅眼の黒竜』を特殊召喚する！」

真紅眼の黒竜

ATK2400 DEF2000

「来たか……！ それがお前のエースモンスターかあ……だが、俺の『超熱血球児』には及ばねえぜ！」

「まだだ。『ダーク・ヴァルキリア』を通常召喚権を使って再召喚！ 効果により魔力カウンターをのせ、取り除く事で『超熱血球児』を破壊する！」

「ち、その効果があつたか！ やるじゃねえかあああつ！」

超熱血球児

ATK2500 ↓ ATK1500

ここまで来れば、あともう一息だ。——さて、決めるぞ……！

「——さらにっ！ 手札より魔法カード『死者蘇生』を発動！ 墓地より2枚目の『真紅眼の黒竜』を召喚する！」

これで、準備は完了だ。

「バトル！ 『ダーク・ヴァルキリア』で『超熱血球児』、『真紅眼の黒竜』2体でダイレクトアタック！」

累計ダメージ、5100ポイント。たとえライフポイントが初期値だったとしても、削り切れるほどのダメージだった。

長門大和 LP0（1500のオーバーキル）

「――俺の、負けか……やるじゃねえか……っ！」

「……そう言ってもらえるなら、ありがたい」

「デュエル終了！ この勝負、イエロー寮代表玄咲楓の勝利により、この試合勝者は、イエロー寮だ！」

教師のその宣言により、イエロー寮全員が湧く。テンションが上がってるな、俺もみんなも。

――だが、僕がこの時戦った長門を見たのはこの日が最初で最後だった。

これは後で聞いた話なのだが、長門は冬休みになる前に転校したらしい。退学した万丈目よろしく、いきなり帰ったとの事だった。

噂によれば、長門は野球強豪校に転校したとの事だった。だが、帰る直前の長門の顔は明るくはなかったらしい。

デュエルは楽しかった。だけど、それに十分な気合を入れている人間はこの世界には多い。

つまり、デュエルに十分な気合を入れていて、それを折られた、という事なのだろうか。

僕は現実世界との相違点に、まだついてゆけずにいた。

To be continued.....

おまけ

「今回の最強カードは『天使の施し』だ。3枚ドロ―した後、2枚を墓地に送る。メリツトしかないカードで、現実世界じゃ禁止カードだぞ!」

「GXの世界じゃ、まだまだ現役。第二期中盤にてプロのデュエリストが使用していたのが確認できる」

TURN - 05 野球対決！？ 超熱血球児（後書き）

遅れてすいません。どうも、YBFです。

野球部分は野球小説のリメイクをしようという考えもあり、そのリハビリのつもりで書いたのですが――駄目だ、大分感覚が失われている気がする。

……うーん。改善の余地アリ、ですね。

と、いうか『地獄の暴走召喚』の効果を思いっきりミスしました。最初。

通常召喚でも効果発動できる気でいました。……あぶねえ……。

故に、『天使の施し』で強引に墓地肥やし、『死者蘇生』で強引に蘇生、とかなり強引さが出てます。

……なんか、かなり急ぎ足で執筆したので、ミスが多そうだなあ……。

あと、次回の更新も執筆してからの投稿になります。

ストックはあるのですが、挿入できそうな話が思いついたので。

……こんな事だから、色々とためなんだろうなあ……。

とりあえず。

誤字脱字、その他のミスがあれば指摘をどうぞ。

積極的に直していくつもりでいます。

では。

追記

2011・9・21 一部、火属性となっていた部分を炎属性に訂

正。

TURN・06 伝説と遭遇！？ 楓VS遊戯デッキ（前編）（前書き）

前回の後書きで言っていた事とは違い、結局ストックを浪費する自分。

では、本編をどうぞ。

気づけば、四度目の月一試験を終えていた。

なんか、ほかにイベントがあったような気がしたのだが、それはもう既に過ぎ去っていたらしい。

うん、SALの話とか。SALの話とか。

――あれ？ あと、何があったっけ？ よく思い出せない。

……まあ、とりあえず、二度目の月一試験、実技試験は、もう一度オベリスク・ブルーとデュエルする事になった。

前回、僕がオベリスク・ブルーに勝ち、寮入れ替えデュエルでも三沢が万丈目に勝利した事から、ラー・イエローの生徒で希望すればオベリスク・ブルーとのデュエルをすることができるようになった。

僕ら二人が勝ったことから、自分の実力に自信を持つ何人かがオベリスク・ブルーに挑んでいた。

そのおよそ半数以上が負けていたものの、僕と三沢はほぼパーフェクトで勝利。

よくわからないチートドロにより、初期手札が凄いいことになった以上、負けるのはありえなかったのだけでも。と、というか相手もよくわからない、という感じだろう。

一言ほど言わせてもらうなら、『ダーク・ヴァルキリア』さんマジパネエっす。モンスター除去おいしいです。だろうか。あ、『スーペル・ヴィス』もおいしかったですよ？

……なんか、『デュアル』使いになっているような気がしないでもない。

いや、だったら『炎妖蝶ウィルプス』とか積んだ方がいいのかな。

……今度、パックで当てれたら検討してみよう。

ああ、そうだ。

こっちの世界に来てから、何度かパックを買ってみている。

主にあたったのは何故か“霊使い”シリーズだった。……使ったことないんだよな、“霊使い”。今度、デッキ組んでみようかな。……使いこなせる気がしないけれども。

まあ、カードはあるから今度作ろう。うん。今度。とりあえず、僕は今日もパックを買おうと思って、購買部に向かった。

そこで、目にしたのは――

“初代デュエルキング、武藤遊戯DECK特別展示！”

——これ以上、イベント介入のチャンスを逃したくない僕は、整理券をさっさと手に入れ、次なる介入に備える事にした。

T U R N - 0 7

伝説と遭遇！？ 楓VS遊戯デッキ（前編）

整理券を入手してしばらく経った後、再び購買部に向かってみると、アニメ通り、翔と神楽坂がデュエルをしていた。

「お、三沢。いたのか」

「ああ。なかなか見所あるデュエルになっているからな」

目の前に繰り広げられているのは、アニメで見えたものよりも少し前の時点。

うーむ。少し、神楽坂が押している？

「丸藤翔と神楽坂のデュエルか。翔はともかくとして、神楽坂はそれなりの実力者だったよな、三沢？」

「ああ。どうしてもコピーデッキになる、という問題はさておき、そのデッキを本人のように扱う事のできるデッキ解析力の高さはデュエル・アカデミアでも上位のものだろうしな」

「で、今回は……クロノス先生の『古代の機械』か。……なかなか難しそうなチョイスだな。まあ、ハマれば強いという強みはあるのは認めるが」

「そうだな。特に『古代の機械』のエースモンスター、『古代の機械巨人』が特殊召喚できない、というのが大きいな」

「……まあ、それでも十分強いのが『古代の機械』なんだよな」

自分は『古代の機械』を作った事はないが、確か現実世界の時に友達が「このデッキはうまく回れば十分に強いぜ」と言っていた。

まあ、でもこの世界だと『古代の機械巨人』の効果が現実世界と違うから、少々弱体化している、といえるのだが。

「で、翔のデュエルはどんな感じなんだ？」

「うん。そうだな。カードの引きが少々良い、と言ったところか。そうでなければ、もう既に勝負が決まっていた場面があった」

ふむ。なるほど。メインキャラクター補正、というヤツか。

そして、そこから一進一退。徐々に徐々にお互いのライフポイントが削れて行く。うん、なかなかいいデュエルである。

「お、何だ？ 何の騒ぎだ ケンカか？ ——ん？ 何だ？」

と、ここで十代が登場。

ケンカという言葉についつい三沢が苦笑する。

「誰だあれ？」

「神楽坂。ライエローの生徒で——」

「見りやわかるって。だから、何を——ん？ 翔？」

「アニキ！」

「どうしたんだ？ 翔？」

十代が、人ごみをわけて翔の下へと向かう。

うん、それにあわせて人ごみが少し動いているのって、空気でも読んだのだろうか。……まあ、どうでもいいか。

「どうもこうもないツスよ。アレアレ！」

そういつて、翔が指差した先を十代は注視する。

「デュエルアカデミアにて初代デュエルキング武藤遊戯のデッキ特別展示——て、事は！ 遊戯さんが使っていたデッキが、この学園に来るのかあ！」

「これはもう、見るしかないでしょ！ ——アニキ？」

十代は先ほどの文章を凝視し、心ここにあらずといった感じになっていた。

そんなこんなで、デュエルが再開され、翔がアニメどおりに勝利を収めた。

……それにしても、翔って、魔法カードや罠カードは結構本格的なものを持っているよな。『魔法の筒』とか、その他諸々……。うん、知識と度胸さえつけば強いんじゃないか、普通に。

そして、見物客は散っていく。神楽坂の陰口を叩きながら。

どうして、そうなるのだろうか。まあ、コピーデッキの印象が悪いというのはよくわかる。理論だけ、といわれるのもわかる。……

だが、そこまで言う事なのか？

「ドンマイ。ま、ついてない時もあるさ」

「そうそう。とりあえず、この負けを次に活かすしかないだろう。そうでない——」

「うるさい！　いつだってオベリスク・ブルーにいけるお前たちに何がわかる！」

そう言っ、神楽坂はその場を去って行った。

そして、夜。

三沢に誘われて、僕は夜中に展示会場に向かう事にした。

展示会場手前では、同じく一足先に見ようとした十代たちと合流した。

「お、十代」

「三沢、楓、どうしたんだ？」

「あつははは。ちよっとフライングしてキングのデッキを拝みにね」

「ま。そんなところさ。整理券があるとはいえ、当日は混みそうだからな」

「なんだ、みんな考えることは同じか」

と、十代が言ったその直後、「マンマミーヤ！」という悲鳴が響き渡った。

「何だ今の！？」

「あの声は！？」

「クロノス教諭だ！」

……まあ、「マンマミーヤ」の時点で特定できるよな……。

「十代、玄咲！」

「おう！」

「そうだな！」

僕らは展示場へ走り、扉を開けるとそこにはクロノス教諭と割れたガラスケースがあった。

「クロノス教諭！」

「展示ケースが！」

「キングのデッキがないだな！」

「まさかクロノス先生が！？」

「ギクーン！ ノンノンノン！」

いや、アンタ犯人じゃないだろうに。

「みんなに知らせようぜ！」

と、十代たちが外に出ようとした時――

「ちよつと待ってデスーノ！」

――と、クロノス先生がタツクルをかました。え？ 僕？ ちゃんと避けたよ？

「何すんだよ！？」

「事が公になると、私が責任とらされるノーネ！」

「だったら早く！」

「そうだぞ。校長に知れたら……」

「もしかしたら免職かも」

「だから違うノーネ！ 私じゃないノーネ！ ないノーネ……」

とにかく必死なクロノス先生。まあ、必死だよな。この世界じゃ武藤遊戯はもはや現人神のように扱われている部分もあるからなあ……。

「んな事最初っからわかってるよ」

「ネ？」

「先生ならガラスケース割る必要ないだろ？」

「普通、ケースの鍵くらいもっていきそうですしね」

と、十代の台詞に付け加えてみる。それにしても、立っているのが僕だけってのもなかなかシニョールだなあ……。空気を読んで、僕も倒れるべきだったのかな？

「そうナノーネ。ガラスケースの鍵あるノーネ」

「まだ時間は経ってない。犯人を見つけ出すんだ！」

「うん！」

全員がうなずき、立ち上がる。

「ドロップアウトボーイ、シニョールたちだけが頼りナノーネ！」

「行くぞ！ 翔、隼人、楓！」

「俺もいるぞ！」

あ。三沢空気フラグキタコレ。

「うわぁー！」

翔の悲鳴が聞こえた。アニメでの犯人——神楽坂の居場所を把握し切れていない以上、見つけれなかったが、声の方向からして近い、というのがわかった。

……多分、この方向。あの崖か。

そう思っ、僕は駆ける。多分、翔の声に気づいて、十代たちもそこへと向かうだろう。

とにかく、ここが僕の介入どころだ。

十代には渡さない。

崖にたどり着くと、そこには倒れている翔と、高笑いしている神楽坂がいた。

「翔、大丈夫か？」

「く、玄咲くん……悔しいよ……あいつが——」

そう言っ、翔が見た方向には、仁王立ちした神楽坂。

「神楽坂……お前がデッキを奪ったのか？ それなら、今すぐ返せ。この事が公にならなっ、いない今なら、大事にはならないかもしれないぞ？」

「フン。嫌だと言ったら？」

「何？」

「これこそ俺が求めていた最強のデッキだ。俺なら、武藤遊戯のデュエルも徹底的に研究している俺なら！ 彼のデュエルを100パーセント再現できる！ もう俺は誰にも負けない！ クロノスだろうが、カイザーだろうが、誰にも！」

……そもそも、誰かのデッキを奪っ、使っ、そんな事はない。

まあ、強いデッキのコピーというのは、確かに強い。【ライトロード】あたりはその典型のように思える。

誰が作っても、大体似たようなデッキレシピになる。そして、ある一定の強さを保証する。

だけど、それを使っているうちは、強くなれない。事実、僕だって最初は「ライトロード」を使って、デュエルに勝って満足していた。

でも、それだけだ。“ライトロード”と名のついたモンスターがある程度入れてさえいれば、デッキの構成力をあまり問わないし、罠カードも特に使わず力押しで勝てる時が大半。

そして、その強さに満足し、デッキに改良を加えない。——それで強くなれるわけがない。

強いデュエリストというのは、自分でデッキの構成を考え、作戦を考え、どういう意図を持ってそのカードを入れるかを吟味しなければならぬ。

だから。誰かが使っていて、強いとわかっているデッキを使うだけなんて、そんなのは強い人間のする事ではない。故に——神楽坂は、弱い。

「翔。デュエルディスクを貸してくれ」

「え？」

「そのデッキがあれば、誰にも負けない？　そうかよ。なら、僕とデュエルしろ。神楽坂、お前が勝てば僕は見逃してやる。でも、僕が勝ったら、潔くデッキは返せ。それでいいだろう？」

「本当に俺に勝つ気がするのか？」

「ああ。負けるつもりなんて、最初からない」

「いいだろう。相手をしてやる」

「玄咲くん！」

翔がデュエルディスクを投げ、僕はそれを受け取り装着する。そして、ベルトについているデッキホルダーからデッキを取り出し、それをセツトする。

「デュエル！」

「デュエル！」

玄咲楓 LP 4000
神楽坂 LP 4000

「先攻は譲ってやるよ、玄咲」

「あ、そ。なら遠慮なく……僕のターン、ドロー！」

初期手札は、まあまあと言ったところか。とりあえず、安全策くらいはとれる。

「僕はモンスターをセット、カードをセットしてターンエンド！」

「ふん、それだけか！？ 俺のターン、ドロー！ 『幻獣王ガゼル』

と『バフォメット』を手札融合！ 出でよ、『有翼幻獣キマイラ』！」

有翼幻獣キマイラ

ATK 2100 DEF 1800

目の前に現れるのは、翼を持つ、双頭の幻獣。

正直、僕からすればあまり強く見えない。それに、ステータスもそこそこと行ったところか。

「行け、『キマイラ』！ モンスターに攻撃！ “インパクト・ダッシュ”！」

「セットモンスターは『仮面竜』だ」

仮面竜

ATK 1400 DEF 1100

独特の形状をした小型のドラゴン、『仮面竜』の防御力はわずか1100ポイント。攻撃力2100の『有翼幻獣キマイラ』の攻撃には、耐えられず、すぐに破壊される。

「破壊され、墓地に送られた『仮面竜』の効果を発動する」

さて、ここでどうするかだ。デッキ圧縮を先に行うか、攻勢に転じるか。

よし、後者だ。

「攻撃力1500以下のモンスター……『黒竜の雛』を守備表示で特殊召喚する！」

黒竜の雛

ATK800 DEF400

それにしても、いつもすまない『仮面竜』。

「ターンエンドだ」

……と、神楽坂が、エンドの宣言を行った時。ようやく十代たちが現れた。

「楓！」

「玄咲！」

翔の悲鳴で駆けつけたが、僕のほうが速かった、というわけか。

「まさか、犯人はお前だったのか、神楽坂!？」

そう言ったのは、三沢。同じラー・イエローとして、あの場で神楽坂を励ましたうちの一人として、今回の行動は予想外かつ、許せないものだと思っただけ。

「ああ、そうさ三沢！ 武藤遊戯を徹底的に研究した俺ならこのデッキさえあれば最強になれる……！ 強くなれる手段を使わないで、どうする!？」

そして、三沢の問いに対して、堂々と答える神楽坂。

駄目だ。大分壊れている。

そんなことをしても、強くなれるわけじゃない。

だから、わからせなければ。

介入してしまった以上、十代がやったことを、代わりに僕がしなければ……！

「僕のターン、ドロー！ 『黒竜の雛』を墓地に送ることで、手札

の『真紅眼の黒竜』を特殊召喚する！」

『黒竜の雛』が大きくなり、目の前に『真紅眼の黒竜』へと成長する。鋭利なその姿はやはりいつ見てもかっこいいものだ。

真紅眼の黒竜

ATK2400 DEF2000

「玄咲君のエースモンスターっス！」

「これで『有翼幻獣キマイラ』の攻撃力を上回ったんだな！」

「さらに、『ダーク・グレファア』を守備表示で召喚し、効果を発動！ 手札の『真紅眼の黒竜』を捨て、デッキから『ダーク・ヴァルキリア』を墓地に送る」

ダーク・グレファア

ATK1700 DEF1600

「バトル。『真紅眼の黒竜』で『有翼幻獣キマイラ』を攻撃！ “黒炎弾”！」

攻撃力2400ポイントの『真紅眼の黒竜』であれば、攻撃力2100の『有翼幻獣キマイラ』を倒すには十分。

『真紅眼の黒竜』が放った黒い炎を浴びた『有翼幻獣キマイラ』は為すすべもなく破壊される。

神楽坂 LP3700

「チイツ！ だが、このカードが破壊されたとき、墓地にある“ガゼル”か『バフォメット』を特殊召喚できる！ 蘇れ！ 『バフォメット』！」

バフオメット

ATK1400 DEF1800

この効果さえなければ、先ほど出した『ダーク・グレファア』は攻撃表示で出したし、そうすればダイレクトアタックできた。だが、『ダーク・グレファア』の攻撃力1700を超える守備力1800を持つ『バフオメット』を出されてしまった。

これでは、攻めきれない。

「僕はこのまま、ターンエンド……！」

「俺のターン。手札から『死者転生』を発動！ このカードは手札を一枚捨て、墓地のモンスター一体を手札に加える。墓地より『幻獣王ガゼル』を手札に加え、守備表示で召喚！ さらに手札より魔法カード『光の護封剣』を発動する！」

幻獣王ガゼル

ATK1500 DEF1200

その瞬間、天空より無数もの光り輝く剣が降り注ぎ、『真紅眼の黒竜』と『ダーク・グレファア』を取り囲む。

『光の護封剣』。三ターンの間、相手の攻撃を封じる永続魔法。このカードがある限り、自分フィールド上のモンスターは攻撃できない。

「僕のターン、ドロー」

そして、『光の護封剣』を除去できるカードも今は手札にない。

ここは、特に動く必要もないな。

「僕はこのまま、ターンエンド」

「攻撃できないから、何もしないか。フン、甘いな。俺のターン、ドロー。フ、来たな。俺は手札より『死者蘇生』を発動！ 墓地より蘇れ！ 『ブラック・マジシャン』！」

ブラック・マジシャン

ATK2500 DEF2000

「何！？ 墓地にあるのは『有翼幻獣キマイラ』だけのはずだ！」
十代がそう叫ぶ。だが、違う。

「……いや、十代。思い出してみろ。そのタイミングはあった。……つい、さっきな」

「何だって？」

「どうやら、お前は気づいているようだな。お前の考えていることは正しいぞ。『死者転生』の時に、墓地に送っていたのさ」

そう、そのタイミングで墓地に送ることができた。そして、今、墓地から特殊召喚するためのキーカードである『死者蘇生』を引いたのだろう。

「そして、手札より『千本ナイフ』を発動。このカードは自分の場に『ブラック・マジシャン』が存在する時、相手モンスター一体を破壊！ 俺は『ダーク・グレファア』を破壊！」

虚空より何本ものナイフ——カード名にあるとおり、千本かもしれないが——が現れ、『ブラック・マジシャン』の合図とともに『ダーク・グレファア』に迫り、為す術もなく破壊される。

「ちっ……」

「そして、『バフォメット』と『幻獣王ガゼル』を攻撃表示に変更し、バトル！ 『ブラック・マジシャン』で『真紅眼の黒竜』を攻撃！ “ブラック・マジック”！」

攻撃力2500ポイント。その攻撃力は『真紅眼の黒竜』を若干上回る。伏せカードを使えば、その攻撃を防ぐことはできる。……だが、それは更なるピンチに使うべきだ。ここで使うべきじゃない。

『ブラックマジシャン』の放った漆黒の奔流にのまれ、鋭利な身体はそれに耐え切れず、爆発した。

玄咲楓 LP3900

すまない、『真紅眼の黒竜』。だが、必ず勝ってみせる……！
「そして、『バフォメット』と『幻獣王ガゼル』でダイレクトアタック！」

二頭の幻獣が迫ってくる。攻撃力1500と1400の攻撃。合計、2900ポイント……！！

玄咲楓 LP1000

「チイツ……！」

これで、ライフポイントは1000ポイントのみ。ここからは一つのプレイミスも許されない。

「貴様程度のデュエリストが俺に勝とうなんて、千年早いぜ」
くそ、かつこつけやがって……！

「僕のターン、ドロー！」

引いたカードじゃ、この状況は打開できない。今できるのは、耐えることだけだ。

「モンスターをセットして、ターンエンドだ」

「フ、守ってばかりか？ ならこちらから攻めさせてもらおう！

俺のターン、ドロー。バトル！『ブラック・マジシャン』でセツトモンスターを攻撃！“ブラック・マジック”！」

「セツトモンスターは『仮面竜』だ……！」

仮面竜

ATK1400 DEF1100

あつという間に破壊される。……なんか、『仮面竜』っていつもこんな感じがする。……なんか、ごめん。

「『仮面竜』の効果！ デッキより『仮面竜』を守備表示で特殊召喚する！」

「く、小賢しい……！ ならば、『バフォメット』で攻撃！」
「『仮面竜』の効果でデッキより『ボマー・ドラゴン』を守備表示で特殊召喚する」

ボマー・ドラゴン

ATK1000 DEF0

「ち、厄介なモンスターを……！」

「流石に、コイツの効果くらいは知ってるか。流石、コピーデッキだ。カードには詳しくないと話にならないもんな」

「コピー、コピーというな！ これが俺の実力だ！ 玄咲！」

目の前の神楽坂が叫んだ。

「いつだってそうだ……！ 俺の戦術をいつもコピーだのなんだのいつもいつも貶しやがって……！ だけど、このデッキでこれこそが俺の実力だと認めさせてやる……！！」

神楽坂の鋭い視線が、こちらへと突き刺さる。

よほど、暗いものを背負っている、というのが伝わってくる。

——じゃあ、僕は？

僕には暗いものなんて特にない。あつたとしても、人並み程度だろう。そんな僕が、神楽坂に軽々しく何かを言えるだろうか。いや、言えはしない。

神楽坂は所詮、アニメの中の登場人物だ。十代も、翔も、三沢もそんな彼らがどうなるうと、僕には関係のないことだ。

でも、目の前に彼らはいる。

じゃあ、これは紛れもない事実。僕にとっての新たな現実なのではないか？

……なら。

「お前がそこまでいうなら、それでもいいさ。でもさ、一つだけ言っつてやる」

僕は今まで通り、自由気ままにやらせてもらうさ。僕はいつだっ

てそうしてきた。

アニメの世界だから、なんてのは関係ない。

ただ、僕は楽しむためだけに選択肢を決めさせてもらっ……！

「僕が勝ったら、それは間違ってた。ということになるだろ、それ。だから、証明してやるよ。お前の考えが、間違ってるってね！」

本気でぶつかってやる。全力で向かってやる。

「フ、そんな事は不可能だ。今の俺のデッキは、最強のデッキだからな！俺はカードを一枚伏せ、ターン終了だ！」

「最強無敵のデッキなど、あるもんか……！僕のターン、ドロー……！」

来た。とりあえず、このカードなら、この状況を打開できる……！

「手札より魔法カード『天使の施し』を発動！三枚ドローし、その後二枚捨てる」

引いたカードは、なかなかのもの。元々の手札から一枚、新たに引いたカードのうち一枚を捨てる。

これで、準備は完了だ。

「手札より『思い出のブランコ』を発動！墓地より通常モンスターを特殊召喚する！」

「『真紅眼の黒竜』を蘇生するつもりか？だが、それでは『ブラック・マジシャン』を超えることはできないぞ？」

「慌てるな。それ以外にも僕は墓地に通常モンスターを墓地に送っている。……そう、『天使の施し』で。墓地より、『ヘルカイザー・ドラゴン』を攻撃表示で特殊召喚！」

ヘルカイザー・ドラゴン

ATK2400 DEF1500

「そして、装備魔法『スーペル・ヴィス』を発動し、『ヘルカイザー・ドラゴン』に装備。そして、手札より速攻魔法『ダブル・サイクロン』を発動！自分の場の『スーペル・ヴィス』とお前の場の

『光の護封剣』を選択し、破壊する！』

「これで玄咲くんも攻撃ができるようになったっす！」

「行け！ 楓えっ！」

「そして、破壊され墓地に送られた『スーペル・ヴィス』の効果で墓地より通常モンスター、『ダーク・ヴァルキリア』を特殊召喚する！」

ダーク・ヴァルキリア

ATK1800 DEF1050

「さらに、『ヘルカイザー・ドラゴン』を再度召喚する。これにより、『ヘルカイザー・ドラゴン』は一度のバトルフェイズで二度の攻撃ができるようになる！」

「チィッ！」

「『ボマー・ドラゴン』を攻撃表示に変更し、バトル！ 『ボマー・ドラゴン』で『ブラック・マジシャン』を攻撃！」

攻撃力では劣る『ボマー・ドラゴン』だが、散り際に爆弾を投下し、『ブラック・マジシャン』を道連れにしようとする。

「だが、爪が甘いな、玄咲！ バトルフェイズに入る前にリバーScardオープン！ 速攻魔法『光と闇の洗礼』を発動！」

「……そ、そのカードは……！」

そういえば、そんなカードもあった。

『光と闇の洗礼』このカードによって、呼び出されるモンスターは……！

「このカードは、自分の場の『ブラックマジシャン』を生贄に自分の手札、墓地、デッキの中から、『混沌の黒魔術師』を召喚する！」

目の前で、『ブラックマジシャン』が何かに吸い込まれてゆき、それが光ったかと思えば、その中から漆黒の魔術師が現れた。

それこそが、『混沌の黒魔術師』。『ブラックマジシャン』を超越する魔法使い族モンスター。

混沌の黒魔術師

ATK2800 DEF2600

それが、僕の目の前に、立ちはだかったのだった。

To be continued

ストックがもうほとんど残ってません。どうしましょう。

とりあえず、ストックがなくなったら更新停止する予定です。一応、受験生だし。

——え？ 受験生ならそんなことせずに勉強しろ？ ……すいません。

とりあえず。

誤字脱字、その他のミスがあれば指摘をどうぞ。

積極的に直していくつもりでいます。

では。

追記

2011・10・10 尚、次回更新時にタイトルを変更しようと思います。お気に入り登録している人は注意して下さい。

TURN・07 伝説を倒せ！ 楓VS遊戯デッキ（後編）（前書き）

前回の宣言どおり、タイトルを変えてみました。

無題からようやく脱出しましたが、一ヶ月悩んで決めた割にはしっくりと来ないタイトルだったりします。

……タイトル募集してみようかな（え

と、雑談はここまでにして、本編をどうぞ。

TURN・07 伝説を倒せ！ 楓VS遊戯デッキ（後編）

対戦相手は、武藤遊戯のデッキを奪った張本人、神楽坂。数々のコピーデッキを作り上げ、そのどれもを使いこなすコピーデッキ。

デッキを奪うという行為は認めてはならない。デュエルで勝ったら、などという事はいわず、実力行使でもよかったはずだ。だけど、僕は神楽坂に勝負を挑んだ。

その理由は簡単だ。

——僕だって、武藤遊戯のデッキと勝負してみたかったのだ。その点においては、神楽坂に感謝してもいい。……だが、そうであればいい、というわけでもない。

——いや、今はどうでもいいか。

そんな事よりも、目の前のことに集中しよう。

目の前に禁止カードが出てきているとか、考えずに、ただ対処する事を考えよう。

つまり、今までののは現実逃避なのである。……いや、だって『混沌の黒魔術師』は結構マジメに禁止級の強さだよね……？

神楽坂 LP 3700

玄咲楓 LP 1000

TURN - 07

伝説を倒せ！ 楓VS遊戯デッキ（後編）

——と、いうわけで。

目の前に現れたのは、『混沌の黒魔術師』。

『ブラックマジシャン』を超越する魔法使い族モンスター。

混沌の黒魔術師

ATK2800 DEF2600

攻撃力は2800とかなりのもの。元々の攻撃力だけを見れば、僕のデッキのモンスターでは倒せない。

だが、それだけではない。『ブラックマジシャン』は攻撃力2500の最上級の通常モンスター、というだけだったが、この魔術師は違う。

強力な効果を持っているのだ。

「くそ、『混沌の黒魔術師』には戦闘で破壊したモンスターを除外する効果がある。それじゃ、『ボマー・ドラゴン』の効果は発動しない……！」

「そういう事だ！　さらに、『混沌の黒魔術師』の攻撃力は『ブラックマジシャン』を凌ぐ、2800ポイント！」

その数字に、デュエルを観戦している翔たちが息を呑む。

それにしても、先ほど神楽坂は『光と闇の洗礼』を使わずに、伏せていた。

と、言う事は、僕が『ボマー・ドラゴン』を守備表示で出してきたのを見て、攻撃表示にするように誘導して来たと見るべきか。

だとすれば、神楽坂はかなりの実力者だ。自分の想像をも超えたレベルに達するほどの。

それにしても、こうやって対戦してみて、『光と闇の洗礼』と『混沌の黒魔術師』がいかにか鬼畜かがよくわかった。確かに、これは禁止カードにもなるか。

特に、『光と闇の洗礼』が速攻魔法、というのも大きい。

今のように、迎撃に使うのもいいだろうし、サクリファイス・エスケープだってできる。

さらに言うならば、追い討ちをかける事だってできるのだ。

『ブラックマジシャン』で攻撃し、その後『光と闇の洗礼』を使って、『混沌の黒魔術師』を召喚し、さらに攻撃する——想像しただけでも、鳥肌が立つほど怖い光景である。

——いや、今はそんな事を考えている場合ではない。

『混沌の黒魔術師』は倒せない。だが、他のモンスターを削っておかなければ、さらなる上級モンスターの召喚が待っているかもしれない。

ここは、相手の場のモンスターを削る。そうしなければ——負ける！

「だけど、モンスターの数だけは減らさせてもらう！　『ヘルカイザー・ドラゴン』で『幻獣王ガゼル』と『バフォメット』を攻撃！」

攻撃力2400ポイントの『ヘルカイザー・ドラゴン』の攻撃に、
二体のモンスターはあっけなく倒れてゆく。

神楽坂 LP2100

「そして、僕はそのままターンエンドだ……！」

「フン、この程度か。呆気ないな……！ 俺のターン、ドロー！
バトル！ これで終わりだ！ 『混沌の黒魔術師』で『ボマー・ドラゴン』に攻撃！ “滅びの呪文”！」

「させるか！ バトルフェイズ前にリバースカードをオープン、『
威嚇する咆哮』！ このターン、相手は攻撃宣言を行えない！ 残念だったな！」

「ちいっ……小賢しい……！ このままターンエンドだ！」

「僕のターン、ドロー！」

相変わらず、いいカードは引けない。くそ、だめだ。

「カードを一枚伏せ、全モンスターを守備表示にして、ターンエンド！」

「フン、防戦一方か？ 俺のターン、ドロー！ バトル！ 『混沌の黒魔術師』で『ボマー・ドラゴン』を攻撃！」

「ちよつと待った！ リバースカードオープン、二枚目の『威嚇する咆哮』！ 攻撃宣言を封じさせてもらおう！」

「……ち、またか……！ 俺はそのままターンエンドだ！」

「僕のターン、ドロー！」カードを一枚伏せ、ターンエンド！」

『威嚇する咆哮』はデッキに二枚しか入っていない。もう、防ぐ方法はない。

勝機が遠のいていく。だけど、あきらめたら楽しくない……！

「カードを一枚伏せ、ターンエンド！」

「俺のターン！ 俺は手札より魔法カード『天よりの宝札』を発動！
！ お互いのプレイヤーは手札が六枚になるようにカードを引く！」

ここで、向こうがドローソースを引いた。これでお互いに手札は

六枚。消耗気味だったこっちとしては少々ありがたい。……が、それを考えても向こうは念には念を入れたかった、という事だろう。「俺は『ワタポン』を特殊召喚。このカードは、魔法、罠、モンスター効果でデッキから手札に加わったとき、場に特殊召喚できる！そして、『ワタポン』を生贄に、『ブラックマジシャンガール』を召喚！」

ワタポン

ATK200 DEF300

ブラックマジシャンガール

ATK2000 DEF1700

目の前に現れるのは、青と桃色の衣装に身を包んだ魔法使いの少女、『ブラックマジシャンガール』。知名度、人気ともにトップクラスのアイドルカード。

確かに、見た目はいい。見た目は。まあ、個人的な意見を言わせてもらうなら、『ダーク・ヴァルキリア』もそれなりに負けてないと思うのだが。どうだろうか。

ああ、知名度か。知名度の違いか！？

……おっと、取り乱しすぎだな。

「『ブラックマジシャンガール』の攻撃力は墓地の『ブラックマジシャン』一体につき、300ポイントアップする！」

ブラックマジシャンガール

ATK2000↓ATK2300

「か、かわいい……この勝負、玄咲君に勝ってもらわないと困るけど、彼女だけは応援しようかな」

翔。言っ たな。後で覚えとけよコンチクショー！

それにしても、『ブラックマジシャンガール』はなぜ武藤遊戯のデッキにしか入っていないと言われるのだろうか。

もし本当だとすれば、世界に三枚しかない『青眼の白竜』よりもレアになるのだが。

いや、もしかしたら、デッキに入れているのが武藤遊戯だけ、というだけで、カード自体は取引されているのだろうか。……いや、トンチじやあるまいし。

まあ、とりあえず、だ。これで向こうのフィールドには二体のモンスター。攻撃力は2000を超えている。

「行け！ 『混沌の黒魔術師』！ 『ボマー・ドラゴン』に攻撃！

“滅びの呪文”！」

強烈な魔法が『ボマー・ドラゴン』に直撃する。守備力の皆無なドラゴン、『ボマー・ドラゴン』は為す術もなく破壊され、除外される。

墓地に送られなかったため、効果も発動しない。

くそ、これだから除外は嫌いだ……！！

「まだ俺の攻撃は残っているぜ！ 『ブラックマジシャンガール』

！ 『ヘルカイザー・ドラゴン』に攻撃！ “ブラック・バーニング”！」

魔法によって生み出された強烈な炎。それに『ヘルカイザー・ドラゴン』が包まれ、破壊される。

「……くそっ……！」

「俺はこのままターンエンドだ！」

このまま、負ける……？

確かに、このままなら負ける。勝機もない。

そんな事はわかってる。でも、それでも。

……と、いうよりも、勝機は目の前に転がっている。……頼んだ

ぜ、『ダーク・ヴァルキリア』……！

心の中でそうつぶやくと、目の前の『ダーク・ヴァルキリア』がうなずいたように見えた。

——気のせいかな？

だが、今はそんなことよりも、この勝負だ。

「僕のターン、ドロー！」

七枚目の手札が、僕の手に舞い込む。……よし、これでこの状況を打ち崩す……！

「僕は手札より『スーペル・ヴィス』を『ダーク・ヴァルキリア』に装備し、効果発動！『ダーク・ヴァルキリア』に魔力カウンターを一つ載せ、そしてそれを取り除き、相手フィールド上のモンスターを一体、破壊する！『混沌の黒魔術師』を破壊！」

「うまいんだな！ 攻撃力2800ポイントのモンスターを、効果で破壊したんだな！」

「でも、フィールド上には攻撃力2300の『ブラックマジシャンガール』がいるんすよ？」

ギャラリーから、そんな声が聞こえる。……そんなこと、わかっているさ！

「さらに手札から、速攻魔法『サイクロン』発動！『スーペル・ヴィス』を破壊し、効果発動！墓地から通常モンスター、『ヘルカイザー・ドラゴン』を特殊召喚する！」

ヘルカイザー・ドラゴン

ATK2400 DEF1500

「そして、『ヘルカイザー・ドラゴン』を再度召喚し、バトル！」

『ヘルカイザー・ドラゴン』で『ブラックマジシャンガール』を攻撃！」

そういえば、このモンスターってアニメには出てないから、技名ないんかよな……。よし、決めた！

「ヘルフレアバースト」！」

中二病万歳！ な技名。……うん、でも満足だ。

そして、『ヘルカイザー・ドラゴン』の放った火炎球により、『ブラックマジシャンガール』は破壊される。後ろから、なんか残念そうな声が聞こえるが……。よし、翔、後で覚えておけ。

神楽坂 LP2000

「そして、再召喚されている『ヘルカイザー・ドラゴン』はもう一度攻撃できる！ ダイレクトアタック！ “ヘルフレアバースト・セカンド” オッ！」

「チイツ！ 俺はこのモンスターの効果を発動！ 『クリボー』！ このカードは、手札から墓地に送る事で、その戦闘でのダメージをゼロにする！」

これも予想通り、だが――

「――だけど、僕にはまだ攻撃は残っている！ 行け！ 『ダーク・ヴァルキリア』！ 神楽坂にダイレクトアタック！」

そういえば、コイツも決まってるや。……どうしよう。考えておかないと。

って、あれ？ なんか、怒ってます？ 技名早く決めないとヤバい感じ？

そんなことを思っているうちに、『ダーク・ヴァルキリア』は神楽坂へと攻撃を開始した。

――どう見ても、攻撃力1800の仕業には見えない件について。

神楽坂 LP2000

だが、ライフポイントはわずかに残る。『ヘルカイザー・ドラゴン』の攻撃を『クリボー』で止めたのが大きいだろう。

「くそ、だが俺のライフはまだ残っている！」

「僕はカードを三枚伏せ、ターンエンド！」

「く、俺のターン！ フ、フフフ……」

急に、神楽坂の様子が変わった。

これは……いいカードを引き、冷静さを取り戻した、という事か？
それとも、興奮しているだけだろうか。

どちらにせよ、ヤバイ予感がする。

「俺は墓地より、闇属性『クリボー』と光属性『ワタポン』をゲムから取り除き——」

光属性と闇属性、除外——これを示すのは——

「出でよ！ 『カオス・ソルジャー』 - 開闢の使者 - ！」

——現実では禁止カードにもなった強力カード、『カオス・ソルジャー』 - 開闢の使者 - 」。特殊召喚の方法が極めて容易。基本ステータスも高く、効果も強力。……禁止カードにもなるわけである。

カオス・ソルジャー - 開闢の使者 -

ATK3000 DEF2500

「バトル！ 『カオス・ソルジャー』 - 開闢の使者 - で『ダーク・ヴァルキリア』を攻撃！ “開闢双刃斬”！」

攻撃力3000ポイントによる攻撃。……これが通れば、勿論、僕の負けだが——

「——させるか！ リバースカード・オープン！ 『ガード・ブロック』！ この戦闘における僕への戦闘ダメージをゼロにし、カードを一枚ドローする！」

「だが、『ダーク・ヴァルキリア』は破壊される！」

激しい剣による攻撃を捌き切れず、『ダーク・ヴァルキリア』は

力尽きた。

破壊されるまでの間に、『ダーク・ヴァルキリア』がこちらを向き、何かを言っていたように見えた。……なんだったのか、わからない。多分、気のせいだろう。

今はそれよりも――

「そして、『カオス・ソルジャー - 開闢の使者 -』の効果発動！ 相手モンスターを破壊したとき、一度だけ、もう一度攻撃する事ができる！」『ヘルカイザー・ドラゴン』に攻撃！ “時空突刃・開闢双刃斬”！」

混沌の名を持つ戦士の攻撃。激しい攻撃。

『ガード・ブロック』は一枚のみ。今度こそ戦闘ダメージを受ける。

「ぐあああつー！！！」

なかなか強烈。衝撃が走る。ソリッドビジョンとは思えないほどの威力。だが、これはソリッドビジョンだ。……なんという、リァリテイ……。

玄咲楓 LP400

だけど、乗り切った。……そして、手札と伏せカードには、状況を打開できるカードが既にそろっている！

「耐えたか。だが、ボードアドバンテージは俺のほうが上だ！ ターンエンド！」

「……神楽坂」

「何だ」

「お前は間違っている」

「何を言っている？ こうして追い詰めているのは俺のほうだろうか」

「違うな。……お前は詰んでいるんだよ」

「何！？」

神楽坂の表情が、驚愕の色に染まる。

「僕のターン！ ドロー！」

キーカードはある。後は、決めた通りにやるだけだ！

「手札より、魔法カード『思い出のブランコ』を発動！ 墓地より通常モンスター、『真紅眼の黒竜』を特殊召喚する！」

真紅眼の黒竜

ATK2400 DEF2000

何度も何度もすまない。だが、これで終わりだ。あともう少しだ。
「攻撃力2400で何ができる？ 『カオス・ソルジャー』 - 開闢の使者 - の攻撃力は3000ポイント。そのカードで何をしてもりだ？」

ここで、魔法カード『黒炎弾』だったりしたら、笑い話だが、そういうのではない。……まあ、デッキにはあるのだけど。

「だけど。そんなものがなくても、僕の勝利はもう決まっている！
「そして、ここでリバースカード・オープン！ 『メタル化・魔法反射装甲』！ 『真紅眼の黒竜』に装備する！」

真紅眼の黒竜

ATK2400 ↓ ATK2700

DEF2000 ↓ DEF2300

「だが、それでも『カオス・ソルジャー』 - 開闢の使者 - には――はっ！？ ……そうか、『メタル化・魔法反射装甲』の効果――！」

「そう、『メタル化・魔法反射装甲』の効果。装備モンスターの攻撃時、攻撃対象の攻撃力の半分を、装備モンスターに加える！ バトル！ 『真紅眼の黒竜』で『カオス・ソルジャー』 - 開闢の使者 - を攻撃！ “黒炎弾”ッ！」

真紅眼の黒竜

ATK2700+(3000÷2)=4200

「効果により、『真紅眼の黒竜』の攻撃力は4200ポイント！
これで、僕の勝ちだ、神楽坂っ！」

いつにもまして大きく膨れ上がった火炎球を『真紅眼の黒竜』は
作り上げ、それを放つ。

攻撃力3000の戦士であっても、それを捌くことはできず、破
壊され、その余波が神楽坂を襲い、神楽坂は悲鳴を上げた。

神楽坂 LPO(1000のオーバーキル)

「神楽坂。これで証明された。お前が間違ってた、ってな」

「——こ、この俺が、負けた……！？俺は、こんな強いデッキを
使っても、勝てないのか……！？俺にはやはり、才能がまるでな
いんだ……！」

「いいや。そうでもないさ」

神楽坂のつぶやきに返す声が一つ。その声の主は——

「カイザー！？」

デュエルアカデミアの“カイザー”。丸藤亮だった。

「明日香！ どうしてここに！？」

そして、天上院明日香も、一緒にいた。そのことについて、十代
が明日香に問う。

「俺たちも、一足早くデッキを見たくてね」

「会場に行ってみたら、ケースが壊れてて、デッキは消えていた。
それで辺りを探してみたら、あなたたちを見つけたわけ」

「止めようと思ったが、止めるにはあまりにも惜しいデュエルだっ
たのでな」

「そりゃそうだ」

「……まあ、止められたとしても、強引に続けましたけど。多分」とりあえず、三沢のカイザーへ対する同意の直後に、そう返しておく。

「それにどうやら、見ていたのは俺たちだけではないようだ」と、いうカイザーの声の直後、周りから人の気配を感じた。

「つて、おい。どこにそんなにいたんだよ！」

「いやー、凄いデュエルだったぜー」

「いいもん見させてもらった。勉強になったよ」

そういったのは、ラー・イエローの生徒。神楽坂を貶していたヤツらだ。

「みんな……」

神楽坂が、その言葉に胸を打たれたのか、その目には涙が見える。「確かに、他人のデッキを勝手に持ち出した事は、許されない行為だ。しかし、その武藤遊戯のデッキが闘い、力を発揮するデュエルをみんなが見たがっていたのも事実だ。みんなも、ここは大目に見るだろう」

その言葉に同調するような声が、あたりから聞こえる。

「けど、俺は負けた……どうして……!？」

「それは簡単だ。いくらお前がプレイングを再現できたところで、その思考回路は武藤遊戯ではなく、神楽坂本人だ。いくらコピーしようとしても、思考まではコピーできるわけがない」

そう、それが一つ目。

三沢曰く「人格をもコピーする」とは言っても、それはあくまでも物真似レベルだ。

どういう状況で、どういう判断をするか。他人のその全てを網羅することなど、いくらなんでも不可能だ。

「それに、デッキを完璧にコピーする、という事は弱点もそのまま残る。——だから、神楽坂。そのままコピーするのではなく、コピーしたものを改良しようとすれば、こんなことをしなくてもよかつたんだ。事実、あの時の【古代の機械】デッキにしろ、改良点はあ

つたはずだ」

僕の言葉にハツとしたのか、神楽坂が目を大きく見開く。

「……だからさ、やり直そう神楽坂。……お前なら、できるだろ？」

その後、武藤遊戯のデッキはもとのケースに戻され、神楽坂はしばらくの間、停学、自室謹慎となった。

月一試験での筆記の成績、そして色々なヤツらからの圧力により、神楽坂は退学及びレッド寮への格下げを免れた。

そして、停学明けからは【魔法族の里】デッキを多用する傾向になった。

どうやら、あのデュエルで神楽坂は「魔法使い族が使いやすい」と思っただけらしい。

そうして向かえた次の月一試験では、オベリスク・ブルーの生徒を実技試験の相手に指名し、勝利する神楽坂の姿があった。

うん、まあ、楽しめたから、いっか。

そう思いながら、僕はデュエル場へと向かう。

そう、いつもどおり、楽しむために。

To be continued

おまけ

「今回の最強カードは『メタル化・魔法反射装甲』だ。攻撃時に攻撃対象のモンスターの攻撃力の半分を、装備モンスターに加えることができるぞ！」

「ロマンを追求するなら、『レッドアイズブラックメタルドラゴン』を召喚するのもアリ。実用性はかなり薄れるがな！」

TURN - 07 伝説を倒せ！ 楓VS遊戯デッキ（後編）（後書き）

どうも、YBFです。今回の更新で地味にストックが大変な事になってます。

一応、デュエル構成の台本は一応作り終えているので、あとは執筆するのみ、なので頑張ればできなくないですが、問題はここから先。来月はともかく、一月〜三月は怪しいです。とりあえず、活動報告で進行状況を報告していき、更新が不可能そうだったら報告にそう書いておきます。

とりあえず。

誤字脱字、その他のミスがあれば指摘をどうぞ。積極的に直していくつもりでいます。

では。

追記

2011.11.11

本文中に表示するタイトルにて、TURN - 06となっていたため

TURN - 07と修正。

脱字を修正。

2011.11.12

誤字修正。『天からの宝札』↓『天よりの宝札』と修正。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0243u/>

遊戯王GX 闇を統べる決闘者（仮）

2011年11月13日03時17分発行